

Métier

OF THE CLINICAL PHILOSOPHY

臨床哲学のメチエ

vol.21

いばしよ

インタビュー
アサダワタルさん
榎井縁さん

臨床哲学

とく

vol.29

特集 居場所

『臨床哲学のメチエ』第二号をお届けします。今回は「居場所」総特集です。冒頭の三篇は、私たちがこのテーマを選んだ理由を陰に陽に提示します。二つのインタビュでは、居場所づくりの先輩であるアサダワタルさんと榎井縁さんにお話を伺いました。タフで濃やかな思考が展開されます。ミニブックレビューでは、「浦河べてるの家」発の著作を居場所に結びつけて紹介します。現役教師である中川雅道さんの連載第四回は、学校での居場所の有無にかかわる「いじめ」の経験を描き出すものです。連帯と共生がひび割れる状況にあつて、安心して話せる居場所をつくることへの要請はいつになく切迫したものになっているように思われます。この課題への取り組みにわずかなりとも資することを願って、この小さな冊子をお送りします。(かわさき ただし)

むじ

吸血鬼の棺 菊竹智之

1

場をひらく 赤阪辰太郎

4

人を轆き、声を轆く 辻明典

8

アサダワタルさんインタビュ

「居場所」という思考を

即興で作る

15

榎井縁さんインタビュ

居場所は場所ではない

26

安心できる居場所のための

ミニブックレビュー 川崎唯史

40

強いとか、弱いとか、いうこと

中川雅道

44

→うしろから

吸血鬼の棺

菊竹智之

私が中学に通い、そして通わなかった街には、モノレールが走っている。そのまだ新しい駅に、顔を出したばかりの朝日が差し込んできている。まるでその光から逃れるかのように、私は、駅の隅つこの薄暗いトイレによく座っていた。

或いはちよつと大きなバスターミナルの椅子に。或いは大きな本屋とかそのトイレ。或いは、或いは…。別に、トイレが好きな訳じゃない。バスターミナルだって。でも私は確かに、家でも学校でもなく、しよつちゅうこの薄暗い場所にいたのだ。



私は中学二年のある時期から、学校に行かなくなった。いじめられていたとかそういう特別な出来事があったわけではない。通学の疲れ、体の弱さ、成績の落ち込み、クラス替え、兄の不登校と復帰、色々なことが重なって、それはきつと、たまたま起こった。

生真面目な母親はとても心配し、あちこちの病院に私を連れて行つた。家の近くの大きな病院。学校の近くの小ぢんまりとした病院。少し遠くにある海辺の病院…。家から遠出する感覚が好きで、病院の建物やその周りのことはよく覚えている。だが医者顔のほとんどはもう覚えていない。思い返せば「学校に行けなくなつた方がいい」と言つてくれていた医者もいたはずなのだけれど、当時の私にとっては、彼らは皆おんなじ顔をしていた。

中学生の私には「鬱病」という言葉の意味もよくわかつていなかったけれど、とりあえず「精神の病」であるということだけわかつていて、そしてそれは「狂人」とかそういったイメージと結びついていて、だからわたしは医者「鬱病だ」と告げられた時、激しく困惑し、否定した。「自分の心は病んでなどいない。自分は学校に行きたいけど体が弱いせいで行けないだけなのだ」。そう思っていた。思っていたかった。「普通」でありたかった。だから、私が病院にきちんと通院し続けることはなかった。わたしに治すべき病などないのだから。

だからわたしは駅のトイレにこもつたし、バスターミナルで昼寝をした。「学校に行きたい自分」を信じている限り、毎日毎日にこもっていることは出来ない。学校に行きたいのに家すら出ないのはおかしいから。だから

ら時々朝どうか家を出て、そうした場所で時間をつぶしてから家に帰った。そうすれば、「学校に行く努力はしたが途中でしんどくなつて引き返したのだ」という言い訳が使えた。それはきつと、親や教師への言い訳である以上に、自分への言い訳だった。

だからだろうか、バスターミナルの硬い椅子で、私は家でサボって寝ているよりもちよっぴり気持ちよく眠れた。誰も私へ顔を向けることのないこの場所では、私が学校に行かないことを咎めたり悲しんだりする人はいない。私は静かな闇に埋没できる。

親や教師の「当たり前前の生活を送らせたい」というそのありふれた善意は、善意であるが故に私を包囲した。もし誰かが私を苦しめようとして、それで学校に行かせようとしているのならば、いつそ私は立ち向かえたかもしれない。だけど、そういうわかりやすい悪役は私の物語には登場してくれなかった。彼らは、悪役の使う枷の代わりに、私を見つめながら抱擁をする。私は、その拘束具を壊すこともそれから逃げることもできなかった。



学校に行くという「当たり前」の期待は、太陽の光だった。

それは人々の暖かい善意だった。

だがそれは、木々に動物たちに人々に、そして土竜にも蝙蝠にも吸血鬼にも、無差別に降り注ぐのだ。

そう。わたしは吸血鬼だ。私は朝目覚めない。私は強すぎる光の下では生きていけない。日の光は、その気になかろうと、私を攻撃する。

その光は、私の身体の隅々までを照らそうと、容赦なく侵入してくる。私のおなかの中のひっそりとした暗闇をかき消す。

学校で、家で、病院で。人々は私の何が「悪くて」学校にいけないのかを暴き、学校に行けるようにしようとした。それは全て彼らの優しさだった。

だがその光は、私が内から発する、か細く小さな蠟燭の輝きを見失わせるのだ。私の拙い生命の主張を。

私に必要なのは私を白日の下にさらし外から暴く、光に満ちた広場ではない。暗室だ。痩せ細った蠟燭の炎が自ら語り出す暗闇だ。朝の光は、私には眩しすぎる。

◆ ◆ ◆

学校に行ったり行かなかつたり、行かなかつたり行ったり。そんな調子で断続的に四年間も続いた不登校は、「高校をやめる」という至って単純な方法で終わりを告げた。その後に編入した定時・単位制の高校は、それなりに薄暗い場所だった。学習が過度に強要されることはないし、成績が順位化されることもなく、同級生たちと競い合うことは必要なかつた。常に居るべき場所としてのクラスは存在せず、友達を百人つくることも求められなかつた。

だがまだそこには学校特有の光がある。私たちの出欠は小さなコンピュータによつて確認されていたし、放課後階段でギターを弾いていたら怒られた。大学だつて眩しい。誰ともなく就職や将来のことを問い詰めてくる。学校は学校であるというそれだけの理由で、わたしが何の気無くそこに居ることを拒んでいるかのようだ。

どこへ行つても、光はつきまといつてくるのかもしれない。

◆ ◆ ◆

そうだ。吸血鬼の私は、自分のために棺を削つて、そこで寝ていよう。その棺には伸縮性があつて、蓋には小さな隙間が開いている。生ぬるい暗闇を求める者は誰もその隙間から入つてくると良い。どうか懐中電灯だけは持ち込まないで。

そうしてあたりが薄暗くなつてきたら、眠つた街で踊ろう。吸血鬼の棺は、ずっと寝るためではなく、そのためにあるのだから。

さあ、朝が来るまで、棺をつくるための素敵な材料と素敵な職人を探しに出かけよう。
夜は短い。これだけは肝に銘じておいて。

きくたけ　ともゆき

大阪大学文学部倫理学専修。いくつかの場所で対話や表現活動の探求に取り組んだり取り組まなかつたりしている。

場をひろく

赤阪辰太郎

誰かと話し合うこと。問題解決や団結を目指すのではなく、自分の思いを打ち明け、相手の言葉を受け入れること。話し合いの場をデザインすること。話し合いのもつ意味について考えること。

話し合うことをめぐるさまざまな側面に私をはじめ「自分のこととして」出会ったのは、二〇一三年の冬のことだった。そのきっかけとなった私の経験について語ることはじめてみたい。

私は二〇一三年三月まで大阪大学のある学生寮に住んでいた。寮は男子専用で、四階建ての鉄筋の建物が二棟続いている。私が住んでいた当時、寮内には人々が集うスペースがなかった。自治会もないため、寮生は互いにあまり交流をもたないまま暮らしていた。寮では風呂、トイレ、台所といった共同スペースを利用するとき以外に他人と出会うことがほとんどない。その意味で、私の寮生活は一人暮らしの大学生のそれとたいしてかわりがない。大学に近く、また寮費は安いいため、私は寮での生活に概ね満足していた。

事件は一月の最終週に起きた。私が授業を終えて寮に戻ると、ポストに大学からの通知文書が入っていた。「留学生との混住化について」という題がついたその文書には、この寮を留学生との混住寮にすること、B棟（二つの棟はそれぞれA棟、B棟という。私はA棟に住んでいた）の西側半分を留学生のための居室とすること、そのためB棟西側に住んでいる寮生に居室移動を求めると書かれている。「寮生の皆様が異文化に触れ国際的感覚を身につけることを目指すため」と文書は言っていた。「実験的にこの寮で混住化を行います。他の寮では、この寮での動向をみて、順次混住化する予定です」。この通知文書を読みながら私は胃のあたりがむかむかするのを感じた。私は怒っていた。

ポストの前で二度読んだ後、自室に戻ってもう一度文書を読み返した。そして、大学に抗議しようとメールソ

フトを開いた。文書に記載されていたアドレスを打ち込んだとき、あることに気づいた。私は四回生であり、今年で寮を出ることになる。混住化が実現したとき私はここにいない。また、B棟の寮生と違って居室の移動を迫られているわけでもない。どのような立場において私は不平を言うべきなのだろうか、途端にわからなくなった。そして、これから出ていくだけの私がメールで抗議すること自体が何かまずさを含んでいるのではないか、という考えが頭に浮かんだ。私はB棟の住民の代弁をするわけではないし、混住化した寮に住むであろう未来の寮生を代表するわけでもない。この件について、私が当事者として大学に抗議することは認められるのだろうか。もちろん真剣にそのように考えていたのではない。メールを受け取るであろう大学職員が私のメールを見た場合、それを誰による、どのようなものとして読むか。それを了解した上で私の意見を「取り合うに値するもの」として処理するか、ということに思いをはせたのだ。

私は不意に、他の寮生がどう思っているのかを聞いてみたくなった。移動しなければならぬB棟の寮生が、これから留学生とともに暮らす下回生が、そして私と同じように今年卒業する寮生が、この文書を受け取って何を感じたのか。違和感を抱いた者はいるだろうか。文書を読んだときの怒りは私だけのものなのだろうか。話し合うことで多くのことが確認されるのではないかと感じた。私は誰かと話そうとしていた。

私の関心が他の寮生と話すことへと向けかえられたとき、何かが変化するのを感じた。それはまず、実践的な課題の変化としてあらわれた。どのようなメールを打つのか、私の怒りが正当なものであるかどうかを見極める基準をどのように定めればよいか、といった当初の課題は消え去り、誰に対して呼びかけ、いつ、どこで、どのような形式で、どれだけの時間話し合うのがよいか。当日は会場に何を留意したら話しやすいか。そうしたことが問題となった。

課題の変化にともなって、目指すものも変化した。問題を解決したいという欲望や、大学に抗議したいという気持ちよりは、同じ問題に直面している人々の声を聞きたいという思いが強かった。声を聞くためには、話し合うこと以外の目的をもたない話し合いの場が必要だ。場をひらくだけではいけない。抗議や問題解決を目指した

話し合いがしばしば話しているその人の姿を見えなくするということを、私は経験的に知っている。誰かの声を聞くためには、自分のあり方をさらしつづつ、相手にかかわるといふ態度が求められる。

このとき、私が向き合っていたのは私を怒らせたあの文書ではなく、また大学などといった抽象的なものでもなく、私とともに話したいと感じる寮生たちだった。変化が起こったときにはまだ、寮生たちとは特定の諸個人を指していたのではない。そうではなく、私がつながることを期待し、また相手が私に対して思いを打ち明けてくれることを期待するような人々だった。私は場のセッティングについて考えながら、心強さを感じていた。私は一人で悩んでいるわけではない。これからつながるだろう人々とともにあるような気がした。

結果を先取りして言うと、話し合いは期待どおりには進まなかった。

文書を受け取った次の日、寮の一階にある掲示板に「一月××日××時から、寮のロビーにて、留学生との混住化について話し合いませんか」と書き込んだ。寮のロビーにはいくつかの椅子とテーブルが置かれている。ただ、冬場はとても寒く、集まってくつろげるような場所ではない。利用する寮生もほとんどいない、形だけのロビーだった。当日、私は自室からヒーターを持ち出し、お菓子と飲み物、紙コップを用意して誰かがあらわれるのを待った。話し合いには五名の寮生がやってきた。B棟に住むある寮生は、居室の移動にかかる費用、住所変更のための公的な手続きなどについて、不安と不満を語った。彼の語ったことのなかには、私が一人で考えているときには思い至らなかったことが含まれていた。それだけでなく、私の呼びかけと彼の語りのあいだには別の何かが浮かび上がりかけていた。それは曖昧で、はっきりとした輪郭をもたなかったが、私は彼の語りのなかにその手触りを感じかけた。

彼の声に耳を傾けていると、別の寮生が寮の掲示板に彼の主張を、いくつかのポイントに分けて整理していった。「ここに私たちの主張を整理して、あとでまとめて大学側に送りましょう」、掲示板に論点を整理しながらも一人の寮生はそう言った。「そうすれば、きっと大学側も何か対策を打ちますよ」。

話し合いのあと、人のいなくなつたロビーで、空のペットボトルと紙コップを片付けながらあたりを見回した。

そこには私に不安を語った寮生の痕跡はなかった。あとにはホワイトボードと、いくつかの論点が残った。

この経験を通じて、私は話し合うことが含むいくつかの側面に心惹かれるようになった。何に心惹かれるようになったのか、また惹かれた理由は、語りのなかにきつとあらわれているはずだ。

また、ここで私が語ったことのなかには、話し合うことをめぐるいくつかの問いが含まれているだろう。その問いを経験から引き出し、抽象化し、疑問文の形に直し、整列させることもできるし、それらに暫定的な答えを与えることもできるかもしれない。問いの形で提示しておけば、誰かが答えを与えにやってくるかもしれない。しかし、私は自分の声を消すつもりはない。声を声に、経験を経験に対置させ、そこに浮かび上がってくる何かを、語り出した誰かとともに感じとってみたいのだ。私はこの文章を書きながら、誰かが語りだす声に、まだ形をもたない残響のようなその声に耳をすましている。

あかさか しんたろう

大阪大学人間科学研究科博士前期課程。

人を轆き、声を轆く 辻明典

僕は家路を急いでいた。車のラジオからは、天気予報と一緒に、各地の放射線量の情報が流れている。毎日のように聴いているけれど、その値はいつも変わらない。この道を通るとき、いつも一抹の寂しさに襲われる。僕は寂しさから逃げるように、今日もラジオのボリュームを上げた。

そろそろ、交差点に差し掛かる。信号が、青から黄、そして赤へと変わる。僕は少しずつスピードを落とし、車を停めた。停めた車の中で、僕はまたラジオのボリュームを上げた。岸壁に打ち付けられる波の音が、微かに聴こえる。今日は、海が荒れているようだ。聴きたくない。波音を掻き消すために、またラジオのボリュームを上げた。どんな番組でもかまわなかった。

信号が青に変わる。僕は、念のため、両目で左右を確認した。モヤがかかっている。安心などできない。気をつけねばならない。それは、僕に課されてしまったものだ。意識ではない意識だ。右足でアクセルを踏み込むと、僕の心はいなくなってしまった。心ここにあらず、いや、そうとも言いきれない。人はいない、家など、この辺りにはないのだから。そんなのは、わかりきったことだ。でも、僕に向けられた声が、声を発しないままに、僕を縛っている。僕に向けられた声。それは、誰も呼びかけることはない。細く、蜘蛛の糸のような繊維が、僕の意識をひっそりと、しかし確実に縛っている。

声の聴き方を忘れてしまった。気づかぬままに、忘れてしまったのだ。内なる声は、いつの間にか聴こえなくなってしまった。声の届き方も、わからない。白状すれば、心の底では、声を聴きたくないと



も思っていた。聴きたくなかったのだ。

しかし、声の持ち主は、突然に、ゆっくりとした足取りで、僕の車の前に現れた。目を閉じる暇はなかった。両腕に力が入ったせいで、一瞬遅れたと思ったが、右足でブレーキを踏み込む。僕の身体は、強い勢いで前方に引つ張られた。そのとき、僕は、その声の主と目が合った。年若いた目をしていた。にらむのではなく、高ぶる感情を押さえきれぬような目で、一瞬の間を突くかのように、僕の両目をじつと覗き込んできた。充血し、真つ赤な血管が浮き上がった両目を、かっと見開きながら、僕の内側に迫り込んでくる。一瞬だけ、その人の口元が緩んだ。すると、まるで穴にでも吸い込まれるように、その人は車体の下に巻き込まれていった。両目を反転させ、真つ白な目を一瞬だけ見せながら。口は半開きだった。その頭は強く地面に打ち付けられ、ぐわんという重々しい音が響く。その音は、運転席でもはつきりと聴こえた。

生まれて初めて、人を轢いた。「人を轢いてしまった」という確信があった。ぐにやりとした感触が、ブレーキを踏んだ右足から、僕の身体に伝わってくる。悲鳴は聞こえなかった。声の聴き方を、忘れてしまったのだから。でも、ラジオから流れる音は、はつきりと聴こえている。

震える左手でサイドブレーキをかけた。乾いた木材が折れたような鈍い音が、耳に残って離れようとしなない。息を整えることなどできず、僕は鍵を左に半分だけまわした。二つつなぎの嫌悪が、僕の心臓をえぐってくる。僕の左胸は、僕が犯した罪を突きつけるように、今にも破裂しそうな音をならしながら、内側から僕の身体をえぐりだす。こんなときでも、やはり疾患が気になる。狂ったような鼓動が、辛うじて保たれた均衡を崩すかのように、僕の内側に巢食っている。心臓が、ピンと張った粒子の系によって編まれそうで、無性に胸を搔きむしりたくなる。人の安寧を奪っておきながら、真つ



先に我が身を察じるとは、僕は残酷な心の持ち主であるようだ。

急いで車外に出た。空は雲に覆われ、月明かりさえ臙げにしか見えない。街灯もない。狂気の影が忍び寄るなかで、いかに正気を保てばいいのか。容赦ない高波に打ち付けられた岩場の悲鳴が、すぐ近くから聞こえてくる。砂塵をのせた潮風が、容赦なく僕を痛めつけてくる。乾いた口は閉じること忘れ、じやりじやりした砂粒が、歯と歯の間に入り込んでくる。僕は腰を屈め、車の下を、砂を噛んだままに、覗き込んだ。恐怖の感情すら、繊維の束に縛られてしまったためなのか、僕にはわからなくなってしまった。

人を轆いてしまった。しかし、声の主は何処にもいない。懐中電灯をともしながら、僕は車の下を覗いた。血痕もなければ、遺体もない。そして、声も聴こえない。安心はした。でも、怖かった。

僕は深々と息を吐き出した。そして、立ち上がるうとした。ここを離れなければいけない。そう思った。思ってしまったのだ。その瞬間であった。僕は腰のベルトをぐっと捕まれ、わけもわからず、急に後ろに引つ張られた。僕はとっさに顎を引いたのだが、少しだけ丸まった背中が、まだ舗装されていない道路に打ち付けられて、思わずうっとなった。しばらく、呼吸がうまくできなくて、その上、じやりじやりした口のなかが始めて、苦しくてたまらない。肋骨の内側が、ぐっと締め付けられたみたいで、息ができない。胃がねじ切れそうになるのをこらえられなかった。燃え上がるような液体が、喉元を突き刺しながらわき上がり、口元から溢れ出す。僕は息を吸うために寝返りを打った。そのとき、地面がぬれているのがわかった。土の表面の砂利が、液体と混ざりあい、どろどろと、僕の掌にまとわりついてくる。さびた鉄のようなにおいが、僕の近くを取り巻いている。真っ赤に染まった鼻先に支配されていた。息を整えるまで、何分かつただろうか。砂塵が口の中に入ってこないように、鼻からゆっくと息を吸いつづけた。



悪寒がする。身体が震えた。声は聴こえない、ただ、ラジオの音だけははっきりと聴こえる。僕は人を轢いてしまったようだが、轢かれたのは僕だったのか。罪の意識は和らいだが、僕はますます僕を縛ってしまったのだ。それだけは、はっきりとわかっていた。

つじ あきのり(文)

南相馬市立原町第二中学校講師、てつがくカフェ@せんだいスタツフ。福島県南相馬市内で、哲学カフェを展開中。

おぎの りょういち(写真)

臨床哲学／美学／文化研究、演劇制作者。上智大学文学部哲学科卒。大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室博士前期課程在学中。考えること、あらわすことの様々なあり方／かたちに関心を寄せています。

今年、これまでの写真作品についても整理・発表を試みます。

「居場所」という思考を 即興で作る

2013/8/13

聴き手

川崎唯史 菊竹智之

アサダワタルさんは、「日常編集家」を名乗り、音楽、文章、プロジェクトなど広い意味でアートと呼べるものを通じて、公私や分野などに裂かれてしまった様々な既存の価値観を編み直すことを試みる。

「家」という空間を閉じきったものではなく、公私の入り乱れる場としてとらえ直す「住み開き」の提唱など、様々な形で新しい場所を開くことに携わってきたアサダさんにとって、「居場所」とは何なのだろう。



色々な「居場所」

——アサダさんはこれまで、直接具体的な場所に関わることも含め、様々な意味で居場所というものに関わってこられたのではないかと思います。まず、そんなアサダさんが「居場所」と聞いてその言葉についてどんなことを思うか聞いてみたいのですが。

居場所という言葉についてですか。色々なタイプの居場所があると思うから一つの答えではないんだけど、一つは、一人で居られる時間や自分に向き合える時間を大事にできる居場所っていうのが、必要だと思っていること。次に、自分だけじゃなくて人と共有する居場所みたいなのがあって。後者の方は、ほとんど居場所の質が入れ替わっていく。その時々自分の関心や相手の関心との関係性や交わりあうタイミングが合って、そして「今ここが居場所なんやな」ってなると思います。そういう一緒にお話ができる広い意味での仲間意識みたいなものを共有できる居場所っていうのは、ほとんど変化していったって、その居場所自体もメンバーが入れ替わったり、自分もひよっとしたらその居場所から抜けていく、あるいは卒業していくとか。だから

自分のコアな部分に対して一人で内面的に向き合う居場所と、そうやって入れ替わっていく、ほとんど卒業していく、けれども同時に次の新たな出会いがある居場所みたいなのが、大きく二つあるかな、って思ってます。

そしてね、その二つが交じり合う場所みたいなものもあるとは思ってますよ。自分の素直な関心とか、自分に内省的に向き合っていることからちよつとずつ開いていって、そこに少しずつ他者が入ってくる感覚。僕にとつては、最近「家」っていう空間をどう捉え直したらいいのかとかいう関心があることも繋がっているかもしれない。

ただ、本当にその二つが混じりあえるかっていうと、なかなか難しく、すぐどこつかに寄っちゃう。一回開いたときに、想定以上に自分を開いてしまっって、場合によってはそのことによってバランスが取れなくなったりとか、しんどくなってしまうり、ってこともあるだろうしね。

でも、人が自分一人で「自分はこんなことができるはずや」とか、「こんなんはできへんわ」、「自分はこれが好き!」みたいに考えていることを違う可能性へとこじ開けてくれるのって、自分というよりは他人

だったりするんですよ。最初は抵抗あるけども、自分を開いてしまったことで他人がその力をこじ開けてくれたりして後々、「自分にこんな可能性があるんや」ってことを再発見することであるから。そういう風に「無理してるな……いま僕は」とためらいながらも、自分一人で考えていく場所から他人と共有していく場所のグラデーションの階段の段差を低いところから少しずつ上がっていくみたいな。そういう居場所のあり方が理想やなって思うけど、まあそれを求めている感じですよ、僕自身も。

居場所はどんどん変わっていく

自分が信頼している友人とか、自分のある程度コアな部分までも共有できる親友との関係、その人と共有している場みたいなものってありますよね。例えば人によってはそれは大学のサークルだったりするんだろうけど。そういう関係からいつだって抜かれるし、いつだって違っこともできるっていう選択を持っていることが前提にある中で、自分のこと、コアな部分を伝えたい、知ってもらいたい、解ってもらいたい相手、友達や恋人なんかが自分と共有している以外の世界を持ってしまっうタイミング

グってあるでしょう。自分の世界を共有できる人がある時期に入れ替わっていく、その時に感じるある種の寂しさや、とはいえ自分も変わっていつていることを認識してはつとする、みたいな感覚。自分は相手が変わったと思っていたけども、相手も「おまえが変わったやろ」って言うみたいな話とか、その相手だけじゃなくて他の人にまで変わったと思われているとか。みんなね「やっていることはちよつとずつ変わっているかも知らんけど根本的には自分はおんなじ人間や」と思っているも、意外と人って周りから見たら——別に服装が変わったとかいうレベルの話じゃなくて、——成長



とも言えるかもしれないけど——どんなにどんなにかく変わっていつている。その変化に関してはある段階からもう共有するのが難しくなる。そこまで相手に関心をずつと持ち続けること自体も難しくなったりとか、違う人と変化を共有しにくくなったりとかがするとか。

僕はそういう人間関係のつながりの中のお互いの関心の持ち方と、カフェとか部屋とか、そういう具体的で物理的な場所ってというのは密接につながっていると思うんですね。だから「居場所」って言ったときの「場所」っていうのは、僕にとってはあんまりどここの部屋で、みたいな感触というよりも、相手との関係の持ち方の「今の瞬間やな」みたいな、「今の瞬間この人ととにかく共有できているな」みたいなことを、自分の中で気持ちのいいバランスで保っているときに、今ここに自分の居場所があり、それを物理的な場所が表象してくれていると。たとえば一回それが違う関係になってお互いもう一回戻ってくるみたいなときって、また同じものを共有しているような気分になっても、もう一回それが生まれ変わっているからそこは違う関係になる。だから仮に物理的に同じ場所でも、違う場所になるんですよ。仮に同じメ

ンバーであつてもね。

だから、居場所には時間軸がむつちや密接に関わっていると思うんです。居場所の感覚っていうのは、それが無いと説明できない。そういう意味においても、自分にとつて常に「やっぱりここがホームやな」みたいな感覚は僕はほとんど味わったことがないんですよ。必ずここに帰ったら、このある特定の場所にあるいは特定の関係性に帰ったら一番落ち着く、みたいなときの「一番」っていつのはすごく相対的なもので、あんまりそれを一言で言えないんですね。「ここが居場所」って決められたら自分の活動や精神状態にも一本太い柱ができて楽になれるのになつていう気はするけれども、なかなかそれは見つけられないし、今後も見つからないんじゃないかなあと。

ちよつと話は広がってしまうんだけど、僕は人格やアイデンティティっていうか、その人の持つているキャラクターとかあるいは肩書きみたいなものも、それに自分を入れる一つの箱みたいに使っているの、この肩書でいる、あるいはこのアイデンティティでいるときが一番安心、みたいな感覚もあんまり無いんです。それは実際生きていく上でなかなか困ったものでもあるんだけど、だから居場所以前にそのアイ

デンティティそのものを編み上げていくと
いつか、そのときそのとき築き上げていっ
て、場合によってはまた崩して、また築き
上げていくっていうことをずっとやり続け
ていくことによって、そのプロセスに付随
して結果的に居場所もずっと作り続けてい
くみたいな感じなんだと思います。ある種
即席、インプロヴィゼーションみたいな感
じですね。

そう考えていくと、誰かと別れるとか、
誰かから去っていったりまた去られたりみ
たいなことに対する構え方も変わるかもし
れない。それが致命的ではないというか、
個人的には「どっかでまた会えるから」み
たいに思っている部分がその別れを楽にさ
せているところがある。

そういう風に、即興でその場にあるもの
をプリコラーージュ的に援用しながら自分
の中の居場所を作る、みたいな感覚を感じら
れるのは、多分どっかで「また会おうね」っ
ていう感覚が「心担保されているからこそ
強気で思えるんやなって」いうある種の保障
みたいなものが正直あるんですね。とはい
え一方では「きっとこの人とは当分会うこ
となんやらううなあ」とか思っていることも
あるんだけど、でもなんか、多分どこかで
期待もしてるんやと思う。「きっと出会い

直しがあるやろう」と。「今はそんなに心
底語れなかつたし、なんだかお互いすれ
違ってしまったけど、また会ったときは違
う関係性で一緒に居場所を作るかもしれ
ないよね。そのときはよろしく」みたいな
ことは思ったりするし。

もっと拡大すれば、仮に相手が世の中に
存在しなくなってしまう、死んでしまっ
りとかしても、そのメッセージみたいなも
のは何かしら残っているというか、死者で
あっても対話できるものがあるのかもしれ
ないけど。そこまでは自分の中ではまだ経
験をしたことがないので、なんとも想像で
しかないんだけど、そういう死者との対話
にもとても興味がありますね。

ひとりの居場所を共有する

今ちょっと思い出したのが、僕が住んで
いる大津の中学校でのいじめ問題が社会問
題になったときに、朝日新聞のコラムコー
ナーで色々な方々がいじめについての思い
を綴ったんですね。その中で、役者でダン
サーの田中泯さんだけが、誰かにちゃんと
その事実を伝えて助けてもらえみたいな内
容ではなくて、「一人になれ」と。「森へ行
け」と。とにかく一人になって一人で過

ごすつていうことの大事さを徹底して伝え
ていたんですね。一人になることを恐れない
こと。友達を作ろうとかじゃなくて、一人
になるっていう時間を作ることによって強
くなること。このような発想って、ちょっ
とずつ堂々とはいにくくなっていると思
います。

逆の方向はよく言われるんですよ。「み
んなでつながろう」と。今、震災のこと
か含めてとにかくメディアでは「つながり」
とか「コミュニケーション」みたいなものがよく
言われている。僕も自分の本（『住み開き
家から始めるコミュニケーション』（筑摩書房）
では一定そのことの大事さは伝えていま
す。でもね、僕はそのことと一人になる時
間みたいなものと、どっちもむちゃくちゃ
大事やと思うんです。それは堂々とした「逃
げ場」なんですよ。具体的に一人になれる
逃げ場があるっていう意味もあるし、妙な
言い方だけど、他人といたとしても、「今
俺は一人である」っていう状況を自分で意
図的に作ったりすることができるか、みた
いなことも含めてね。それは、いきなり人
前なのに堂々と目の前の人差し置いて携帯
ゲームを始めるみたいなわかりやすいこと

を言ってるわけじゃないんです。一人にな
ることをお互いが尊重し認め合える関係に
なっていたら、それはまたつながりとか
絆と簡単に言われることは違う次元のコ
ミュニケーションっていうか。別にお互い
を無視し合っているわけじゃなくて、困っ
ていることがあるのに「いいや、俺は今一
人モードだからあなたのこと手伝えませ
ん」とかいうことでもなくて。

田中泯さんは「森へ行く」みたいなこと
を言っただけだと思っただけで、一人で自
分に向き合う時間を、物理的に一人じゃな
くても、他人と一緒にいながらもある種そ
ういうものを意識的に作っていきける環境を
お互い持てれば、実はもうちょっと違っ
たコミュニケーションというか、違った尊厳、お互
いのリスクのあり方みたいなものが生ま
れたりするのかな。まあ僕自身が、もうか
なり一人が好きで人間なので、基本的に。

何を共有するのか

——この赤阪と菊竹の文章²みたいに、
共有するにも語りにくいこととか、ネガ
ティブなことはありますよね。そうした
ものが開く場の核になることって、今の

2 本号掲載の「吸血鬼の棺」一場を開く。
アサダさんには事前に読んでいただいた。

話のように好きなものとか思い出とかが
核になるときに比べて難しいようにも思
うのですが…。

僕がさっき言った「共有する」っていう
のは、実は「モノ」的なことではなくて。
わかりやすく「君〇〇が好きなんやね」「そ
うそう」っていう共有はすごくタグ化され
やすいし、全部タグ付けしていったら、お
互いの共有関心が検索エンジンのようにす
ぐ引つかかりそうな話になっていく。でも
その人が仮に何を好きであったとしても
その「好きのなり方の感覚」や、その人と
その好きなものとそれが存在する社会との
関わり方とか、他人との関わり方とか。モ
ノそのものというよりは、構造みたいなね。
どういう発想で物事を見ているかみたいな
その感覚の構造を共有できることの方が
やっぱり僕はよっぽど興味があるし大事だ
と思っんです。そして、意外とそっちの方
がすぐに気付いたりするんですよ、「あの
人は近い」っていうことに。自分とは一見
キャラも分野も全然違っけどその発想の構
造が近いとかね。そういう感じで共感をし
て人はつながっていくと思っんです。もち
ろん、別に近けりゃいいってもんでもなく
逆に言えば、自分の物事への関心の持ち方

の構造がまるで違う人でも、何がどう違
うかを考えればその人に対する関心が生まれ
いたりしますよね。とにかく、そのモ
ノがダイレクトに好きっていうよりは、モ
ノに出会ったり人に出会ったり、自分とそ
ういう対象の間にある間合いの取り方とか
関係の切り結び方自体の共有感覚がどこか
に生まれたときに、人ってすごく居場所を
作りやすいんやなと思っっているんですよ。
やっぱり居場所は、ただ単に「あつ、テニ
スやってるの、俺もやってるねん」「A&B
好きなんや、俺も好きやねん」だけでは作
られへんと。どう好きで、何と一緒に好き
で、どういう関係性の中で今自分はその対
象に対する関心を話しているか、っていう
ことを共有できれば、なおさらその人との
間である種の居場所みたいな感覚を共有で
きえると思っんです。この感覚はその人独自
に持っている哲学みたいなものなのでそん
なにガッツリ変わるものじゃない。それが
根本的にがらっと変わるっていうのは、そ
れは相当な変化だと思っし、あんま変わら
へんからこそその感覚がすぐに共有できに
くい人とは僕自身は無理に仲良くなろうと
はしないですね。

そういう風に、関係の取り持ち方、その
相手との関係の持ち方が、「モノ」的か、「コ

ト」的かというか。それで全然違うつながり方が生まれる気がします。

「ネガティブ」なつながり

そうして考えたときに、ポジティブとネガティブっていう感覚も判断が難しいところがあって、それもシチュエーション次第では、ネガティブなことがポジティブに転化するときもあるんですよ。なんか、ポジティブ／ネガティブっていう感じとか、強さ／弱さみたいなものって、すごく文脈依存的に反転するっていうか。

例えば、すごく生き方として不器用な故に、その人の周りに人がついてきて、何かが生きている人っているんですよ。その理由は説明するのが難しいことで、強いて言うなら「弱さの力」みたいなことなのかもしれない。本人が別にその力を意識しているわけでもないかしらんし、ある種自覚をしている人もいるやろうし。何でもかんでも器用にできるとか、いつもポジティブに喋れるとかみたいな明らかにポジティブな感じのことじゃない、社会に対してすれていたりとか、何か素直に出せない感情を抱えていたりとか、明らかに物事を動かす上で器用ではない、言いたいことをうまく言語化できないっていうことに対し



て不思議な関心が注がれてそれが力を持つことってある。

人が相手に関心を持つときの関心の持ち方っていうのは、普通はまあ、何かができるとかそういう特長的なことを言うことが多いですよ。でも、そういう世間的に特長じゃないようなことに関心を持ってしまつて、相手のことを気になるきっかけが生まれて。それは別に恋愛であろうが友達であろうがなんでもそういうやと思っけど、そこから何か関係性が生まれていって、その人の弱さの力もたらす自律的なコミュニケーションが立ち上がる状況は実際あるから。

やつぱり、そこも関係性の中で、まるで光の当たり方が変わるといふか。光がどこにどのように当たられかによって、完全に反転して、ぱっと見ネガティブなこととポジティブなものに「揺らぎ」ができて、そこですごく針が振れるみたいな。急にこつちに振れる、みたいなことですね。

そういうことを最近になってすごく思ったことがいくつあったんですよ。「言葉になかなかできへんかったけど、この人は言葉にできない部分の魅力を持っている人なんや」みたいなことを感じるのって、僕もそれなりに歳を食つてからというか、十代〜二十代ではなかなか気づけなかったところかもしれないね。

つながりと居場所

これまで話してきたようなこととして抽象的なことだと思っし、相手に対する関心をいきなり抽象的な話で切り出すってことはできないから、まずは何か具体的なことをきつかけに話していくんですよ。そうして相手が抱えている問題意識みたいな話へとつながったときに、きつとその相手すら自覚していない、具体的な問題の奥底に潜んでいるもつと根本的な何かがあるんやなと思える時が来る。さらにその問いの持ち

方に自分が共感できたとき、そこには大きな収穫がありますよね。「自分もその問題意識の表現の仕方は違うかも知らんけど、きつとあなたとかなり近い感覚を持っているよ」ってなったときに、相手もきつと自分が向き合っていると思っていた具体的な問題に対する違ったアプローチからのブレイクスルーが起きることがあって。だから

一方では、自分はなんで今ここでこういう風を感じているんやろ、といった感覚に対して一人で向き合いつながら問いの立て方をどんどん変えていく。一人で筋トレをするみたいだね。それこそ哲学の存在がまさにそうかも知れない。でも同時に、他者との対話を重ねていく過程で絶対自分の筋トレだけでは普段使わない筋肉が使わされてしまったことで、これまでまったく自分が意識してこなかった思考のボタンが押されたりとかね。無意識のドアが開かれていくみたいな感じっていうのがあって。また一人に戻ったときに、今度はそのことをもう一回再認識した上で問いの立て方を変えてみたりするっていうことの繰り返しをやっている気がするんです。何かそうすること、一人で考え、他人と何かしらの形で共有しあい、そのことを持ち帰ってまた一人で考え、「また会おうね」って感じで

会っていった、そして「また会おうね」のメンバーは実は入れ替わったりとかしている。そういう過程のなかで多様な「居場所」が後追いで生まれていっている気がする。

意味から離れて

これまで居場所を物理的な場所だけを指すのではなく、時間軸も伴いながら生まれる他者とのその瞬間瞬間の関係性が文脈になって発生する「居場所」として捉えてきたし、そういうことってほんと常に思考している状態から出てくるひとつの答えなんだと思うんですね。でも矛盾するようだけど最近思うのは、そういう思考する部分すら止めてしまえるような時間の重要性についてなんです。まあそれは寝ることかも知らんし、めちゃくちゃ体を鍛えるとかひたすら走るとか、無心に屁理屈言わずに修行するみたいな世界。「意味は問うな、ただこれをやりつづけたらええ」みたいな世界ってあるじゃないですか。個人的には最も苦手な世界なんですけど(笑)。そういう状態ってこれまで話してきたような思考性を進める際に、逆に必要になるんじゃないかって気がしているんです。自分で考えて、誰かとシェアして考えて、また自分で

考える、みたいなことをやっていく中で、まだ全然そこまでやれてないけど、こういう思想・発想とはまた逆で、自分が得意としないようなある種の「型」とかを「ただひたすらやり続けなさい！」と命じられてやるっていう、禪とかに近いかも知れませんが、そういうものが持つ意味みたいなことをこれまた「考えて」しまっただけですね。思考しまくる時間と、そこから全く離れてしまう時間みたいなものが、交じり合う場所。ある種の型にはまらないような思考者をするための話をしているはずなのに、ある時間はある型にはめてみるっていう時間を持つておくっていうこと。僕だったらドラマーのはしくれなので何にも考えずにただBPM60のメトロノームを見てずっと同じ律動を叩き続けるとかね。

「対話できないものと対話をする」感覚とも言えるかも知れませんが。もはやそこは理解不能で。対話できるものと対話をして分かり合えないかなと思いつながらも何かを得ながらやっていくという回路と、もう絶対的にそこは対話できへんやろなっていうところの中で、ただただ何かを何の見返りもなくこなしていく——この「こなしていく」って言い方が正しいかもしれません——みたいなことっていうのは、並存して自

分の人生の中に絶妙なバランスであるとい
いながら、気はしている。それは一人で自分
と向き合う時間ともまた違った、——自分

と向き合う時間ってというのは、ある種の自
分のアイデンティティをずっと意識してい
く時間なんだけど——そんな邪念すらも入
らない時間。「いやそんなごちゃごちゃ言
わんとずっと歩き続けるよ！」みたいな時
間を持つことの「居場所」みたいなことも
あるのかも知れません。そこにすごく関心
がありますね。自分ができていないだけに
関心があつてね。その時間を持ったときの
バランス感覚はぜひ知りたいな。何人が僕
の周りにもいるのよね、そういう「謎の時
間」を持っている人。

対話の中でコミュニケーションしてい
くことは、言葉にしていくことで
もあるし、言葉になりにくいものでも、やつ
ぱりコミュニケーションしていたら徐々に
何か言葉が編み出されていく。それ自体は
人間にとって必要なことなだけども、そ
ういう意味を生み出していく作業から離れ
る時間を持つことってすごく難しく。意
味から離れられる時間を持てたときに、も
う一回ある時間に戻ってきてみると、普段
気づかないものが見えたりとか、またそこ
から対話が生まれてっていうことを繰り返

しやっていくってどういうことなんかなと
今日改めて思いましたね。

「敵」のつきあい方

——場を作っているときに、その人がそ
のつもりかは別として、自分が敵だと認
識してしまうような人が来ることもある
んです。気になっているのは、敵をどう
減らすかということではなくて、自分が
そう思ってしまうことの方なのですが
……。

その敵をどうしたらいいやろうってより
は、自分のその捉え方をどうしたらいいや
ろうってことですよね。その感じって
いうのは、僕もゼロではないな、たしかに。
うん、なんかその問いは、僕が今日最初の
方に言った、ある種の共有できなくなつた
寂しさとか別れみたいなこととちよつと近
い感覚かも。自分が、他人との関係におい
て、いったい何を居心地がいいと思ってい
て、何にこだわっているかっていうこと
っていうことは、居心地のいい環境に居続け
たら絶対わからなくて。何がそこに異物
が入ってきたりする状況があつて居心地
の悪さを感じたときに、初めて「俺ここ好
きなんやな」って改めて気づいたりするで

しょ。そのこと自体がすごく大事なことでや
と思うんですよ。変な言い方なんだけど、
居心地がいいところに居続けるっていうこと
によって、だんだんだんだん、辛くなって

くるって思いが、僕はひねくれもんなので
あるんですよ(笑)。逆にどんどん去りた
くなってくるみたいな感覚を、ある段階で
気づけた方がいいなと思っていて。そりゃ
当然、話が合う人たちと一緒にいた方が気
が楽だつたりするし、なんかツーカーで分
かりあえる仲間みたいに思えたりするよ
ね。でもそれも永遠には続かないからね。

一時的なものだし、そうやって共有できて
いるときは幸せかも知れないけど、例えば
大学卒業したら、みんな全然別々の人生歩
んでいくんですよ。その別々の人生は当
然共有するには限界がある。今でこそフェ
イスブックみたいなSNSがあるからなん
となく「ああアイツもついに子どもができ
たんや」とか、「アイツなんか会社で頑張っ
てこないいい写真あげてるな」とか、分かっ
た気になるけど、やっぱりほとんどの部分
は当然お互い分かち合えない。

段々そうなっていく過程で、僕は色んな
場面にその、個々のコミュニケーションの中で共
有しているのは別の感覚、あるいは自分
はこのコミュニケーションのこの部分を共有し

ているから居心地がいいと思っただけど、何の何人かは実はこの部分を別に持っていたりして、どこの部分にアクセントを置いてくるか検討がつかないから、俺には居心地が悪い、とかね。そういうことを感じていけると、自分がいま所属している「コミュニティ」をもうちよつと多面的に再認識できるっていつか、そういうきっかけにはなるからね。そういうことは必要なことなんだと思いません。

だから変に敵だと感じないようにするっていうよりは、敵だと感じてしまってるねんけど、まあ「お、敵か」みたいに軽く思えるってのが素直な解決策じゃないかな。「敵って思ってるわ、今俺」「むういこうと干嘛やろ……」って感じられることが大事かもね。

——そうかそうか、そうですね。

だって頑張ったって思っちゃっやんやもんね、そこは。「あ、敵発見してしまったわ」みたいなね。「敵がいるってことは俺こめっちゃ仲間やと思ってるわ」「どこの部分を仲間と思ってるんやろ…、ここの「みたい」な感じになってる。

——何も敵だと思わないようにしようというのではなくて。

僕はそれは無理やと思う。そんないい人になれたらいいけど、僕は無理やから。ムカついたりするときも当然あるしね。感情やからついつい出てくるし。思った瞬間にそう思っていること自体はいつたん認めて、そこから考える方がなんかおもしろいよね。思考の順序としては。

敵って言い方はしないけど、自分にもそういう経験は日頃細々いっぱいあると思う。すごく思っただけはあんまりないけども。そういう違和感みたいなものは積み重なっているんやなって思いますよ。

——敵だと思っただことを抑圧せずに、敵だと思わないようにしようとするのも、敵だと思って排除しようとするのもなく、「今自分はこの人を敵だと思っただ」と認めることが大事なのかなと。

そうですね。敵だという思い方も色々やと思っし。すごく仲のいい友達の間で、でも僕以外のメンバーとは皆友達で、みたいな人が入ってきたときに、「あ、こいつなんや

ろ…」みたいな思い方の敵もあるかもしれないし、たいしてこの仲間とも仲良くもないんだけど、そこにさらにもう一人現れたときに思う敵みたいなものもあるしね。要はそれって、「自分は一応この人たちのこと知ってる」と思っている自負みたいな部分が崩される瞬間で、「なんや俺知らなかったんや、この人のこの面を」っていうよくわからん自意識みたいのがそこに生まれていて。だからそこに気づいていけることは、敵っていうことをなくすというよりは、いいクールダウンをしてくれるんだと思う。まあ生きてるともうそんなことの連続でもあるし、いちいち敵やと思っただら大変やから、というか、いちいち敵にムカついたら大変やからね、そういう風に思っていくことで、ある種の自己感情マネジメントをしていく。

「敵やと思わんとこ」っていうのもそれはそれでそんなに達観できないし、永遠にその違和感がなくなつて、なんかこう、皆つながって地球村みたいな話にはならないと思うから（笑）。「みんな友達やんな」とかよう言えないですしね。

居場所の彼方にある居場所

さてさて、普通に居場所って言葉を聞いたときには「自分にとって居場所は家かな」とか「学校かな」みたいな回答もあるし、それはそれでそういう考え方も全然間違っていないと思うんだけどね。でも「居場所って何？」って言われたときに、僕にとつては、居場所って考え方自体から自分でその場その場即興で作り上げていったりとか、今この行為そのものが居場所であるとか、モノ的ではなく「ト的」であるとか、そういった思考をしながら、ある種の「ライブ感」を大事にしながら居場所の意味自体を変えていくってことが大事な気がしています。「居場所」っていう考え方に縛られないっていうか。その方が、居場所って言葉が持っているであろう「安心してある時間を過ごせる」という風なことに近いことを実は結果的にできるかも知れない、っていつ妙な確信はあつて。自分がいわゆる物理的な「場所」にこだわっていないかったりとか、働き方とか、他人との関係性の持ち方とか、自分のアイデンティティとかも含めて色々と拡散的にばらけさせてあれこれ同時多発的にやっているタイプの人間なので、正直今日みたいなお答えにならざるを得ないところがあるんです。だから考えたくて考えている部分もあるけども、そう考え

ないと動きにくいっていうか、やっていきにくい部分もある。固定して「ここがホームです」みたいな考え方を持ったときに失うものも多くあつて、そういう風にある種、居場所自体をプリコラージュしていく感じを持ち続けられるっていうことは、それはそれで幸せなことやなと思っているんですよ。

そういう考え方もあつて、誰かが居場所と思うことを、相手が居場所と思うタイミングって——そのときは居場所って言葉は多分使わないんだけど——、そういう関係を取り持てる素敵な瞬間ってあると思うから、やっぱりね、そこかなと。そこを、できるだけ見落とさないように敏感に丁寧に注力していけたらなという気がしています。

アサダワタル

“日常編集家” という名の放浪芸人。

一九七九年大阪生まれ。公私の狭間、異分野間を漂泊しながら、既存の価値観を再編集する表現を、文章、音楽、プロジェクトを通じて創作する。二〇〇二年、バンド越後屋のドラマーとして二枚のCDをリリースしバンドは解散。二〇〇三年以降、ソロ名義の大和川レコード、ユニットSJO (HEADZ)でのライブやCM・映画での演奏活動を行う。その後、表現活動を“音”から“場/事”に拡張し、各地域に滞在しながら行うコミュニティプロジェクトの構想演出、教育・福祉現場における音楽ワークショップの実施、それらに纏わる文筆活動を開始。近年は自宅の一部を他者に開放する「住み開き」を提唱。著書に『住み開き 家から始める「コミュニティ」(筑摩書房)など。各メディアでの連載も多数。これまでの活動に関しては、ウェブサイト「日常編集集 (<http://kotoami.org/index.html>)」に詳しい。臨床哲学研究室とは以前授業のゲスト講師としてお招きしたご縁がある。

2013年の1月、授業にゲストとしてお越しいただいたとき、「アサダさんのような生き方をする上で大切な心構えは何ですか?」という質問をしました。お答えを今もよく覚えています——「何事にも無関係だと思わないようにすること」。しばらくして、「居場所」をテーマに『メチエ』を作ろうと決めたとともに、この言葉は私のどこかで響いていました。

インタビューの中で、とりわけ心に残ったお話が二つあります。一つは、居場所とはそこにいれば必ず安心できるホームのようなものではないということです。「ここさえあれば安心」と身をすっかり場に委ねてしまうことは、居場所をつくることとは似て非なるものであるように思います。

このことは、居場所にとって「場所」と同等かそれ以上に「時間」が重要だという二つ目のお話に結びつきます。時間を重視することは、変化に敏感であることに他なりません。一緒にいる他人の変化、自分自身の変化、あるいは関係の変化。変わるのは関心の向かう先かもしれないし、抱えている問題かもしれません。生が時間とともにあるかぎり、何かに出会い、見舞われ、手に入れ、あるいは失いながら、私たちは変わっていきます。居場所を探し求めると、安心して話せる相手がいることと同じくらい、自分がいま気になることや考えたことに目を凝らすことも大切なのです。

だからこそ、ある居場所がなくなることを恐れなくてもいい。変化しながら移動し、新たな関心や問題に応じたつながりに開かれることで、居場所は編み直されるからです。このことはもちろん、その途上で別れがあることを含意します。別れは寂しいものですが、自分や相手の変化から目を背けてまで一つの居場所にこだわることは別れ以上の悲しみを生むかもしれません。依存

症をもつ人たちの回復を支える人間関係をめぐる当事者研究から生まれた「「ちょっと寂しい」くらいがちょうどいい」という言葉も思い出されます（上岡陽江・大嶋栄子、『その後の不自由』、医学書院、2010年）。

何事にも無関係だと思わないようにすることと、何に関係があるのかをよく考えること。居場所をつくるとき、心に留めておきたいアイデアです。アサダさん、ありがとうございました。（川崎）

アサダワタルさんインタビュー 後記

学校、クラス、会社、国家、家族…。私たちが所属するとされる様々な単位がある。思えば私はそのどれからも逃げてきた。最初は居心地がよくても、いつかは居づらくなって、次の場所へ移っていく。その繰り返しだ。学校やクラスといった単位で居場所を考える限り、その場所に合うか合わないかでしかその場所を考えられない。

アサダさんは、そうした既存の単位を超えたところに目を向けようとする。無論そうした単位の影響はあまりにも大きく、それを無視し去ってしまうことは、現実を見誤らせるだろう。しかしくらそうしたものが入り込んでいようと、実際に存在するのは、その単位自体ではなく個々の人間同士の関係なのではないか。

そこに視線を移し替えたとき、私たちは場を享受する者ではなく、場に参与する者へなっていく。居心地のよい場があるのではなく、自分たちでそれを紡ぎだすのだ。

これは旅人の生き方だとも言えるだろうか。放浪し、自分のできることを軸に人と関係を結び、時に一所に留まり、そしていつかは再会を期しながら別れていく。これは決して特殊な生き方などではない。私たちは皆、時間の中で絶えず変わりながら生きていくのだから。（菊竹）

居場所は場所ではない



「たたかう国流」と呼ばれることもある公益財団法人とよなか国際交流協会は、その多彩な事業の中核の一つに居場所づくりを位置づけています。本インタビューでは、「居場所」に関心を持つ学生ふたりが、長年にわたって同協会を支えてこられた榎井縁さんといっしょに「居場所」を考えます。



大阪大学大学院文学研究科、臨床哲学研究室の院生で、
ザイニチ。

2010年度より、主に外国にルーツをもつ子どもの居場所
づくりのボランティアとしてとよなか国流で活動中。



えのり
木夏

ゆかり
縁家

インビュ
ー

横浜中華街の裏町生まれ。

小さい時は多様な子どもたちのなかで生きたために、人と違うことに違和感をもつ学校集団では強烈な排除を体験し、自己喪失感に長くつき合う。10代最後にフィリピンの草の根民衆運動に偶然に参加し、「社会構造」によって抑圧される“小さい人びと”の内なる力を知り解放の糸口を見つける。

大学卒業後は観光ビザでネパール王国に渡り、ソーシャルボランティアとして活動、帰国後その体験を元に「チベット難民児童奨学金」を設立、中学校教員をしながら、同NGOを現地チベット人教員と二十年以上運営。1990年入管法改定時には神奈川県国際交流協会で「かながわ国際識字プロジェクト」の事務局長をつとめ、被差別部落や在日朝鮮人など日本の非識字者を中心として第三世界のワーカー・支援者・関係者がつどう場をつくり、識字の現場を調査する。その中でニューカマーの問題に出会い、その後、大阪市教育委員会、とよなか国際交流協会などで外国にルーツをもつ女性や子どもとともに活動を重ねる。

現在は大阪大学未来戦略機構第五部門の特任准教授。日本で多文化共生社会をきり拓く理論と実践を、学生や教員とともに構築している。

大阪大学大学院人間科学研究科、
社会環境学講座福祉社会論専攻。

11ブッリョ
#高橋



自立生活をしておられる障碍者のヘルパーとして活動してきた。豊中市内で、引きこもりの人などを中心とした居場所提供事業にも関わる。

金 居場所っていう言葉とか、居場所を作るとか、社会に居場所を作るとか、広くそういうことについて特集が組めたらなど思っています。

それで、僕も国流「とよなか国際交流協会のこと」ですつとボランティアをやってきましたが、事業の体系の中に居場所という言葉を入れて取り組んでるということもあって、榎井さんのお話は前から皆聞きたがっているというのがあって。だから今回ぜひこの機会にということで。

何から話せばいいかなつてずつと思つてたんですけど、ひとつやっぱりもう一回聞きたいと思うのは、榎井さんがとよなか国流に関わりはじめたきっかけと、そのときどんな状況だったのかということと、そこからおおまかに、どんなふう



榎井 国流ができたときは大阪の市教委

で働いていて、豊中にすごいものが出来ると聴きました。二十年前に「地球市民を創る」って。地球市民。かつこいじやんで思つて。それでワークシヨップという手法がまだ日本で普及していない時代に、どこもやってないようなワークシヨップを次々とやつて。

金 どんなのですか？

榎井 子どもの権利が批准されて間もなかったと思うのですが、それを国内で推進する人たちが関わっていましたね。子どもの権利つて、頭じゃなくつて、身体がほぐれないと大人はわかんないじゃないですか。でもワークシヨップつて慣れない大人はなかなかできないし、市民権も得てなかった。

大阪市教委の教員の人權研修へ、とよなか国際交流協会の職員を講師に呼んで子どもの権利について考えるワークシヨップを初めてやったんです。当時の大阪市教委の先生たち——管理職に近い五十代の人たち八十人くらい集まったんですが、椅子から立たない。おっちゃん

たち。立つたりとか体を動かしたり、人と触れ合つて話すとかいいう研修を一回も体験したこと無いから、頑なに立たない。みたいなあの時代に、それを私が覚えてるだけで月に三十回くらいガンガンやるつてなんという不思議な場なんだろうと思つたんです。

ただ地域住民とのズレはあって。宇宙人が来たみたいな違和感。海外経験をした人たちが、英語などを使って留学生支援をするような国際交流が望まれていたのかもしれないです。

わたしは初代の人たちの直後にリクルートされたので、怒みやつらみが残っているように感じました。たぶん理想が先行したのでしょうね。その上その頃の行政の影響も強かったたので、予算を取つてくる、予算を消化することがダイジなんです。平等主義的に「あれもしますこれもします」という感じでした。一体何を大事にしたいのかわからないのが平等みたいな。豊中市は当時「人權」を政策に掲げており、国際交流協会もその傘下で設立されたのですが、男性性や権力性を持ち合わせた組織でもあったよう

す。

でなにか事業を変えるきっかけとして日本語教室に来ている外国人に、アンケートをしました。どうですか。ほとんど満足してますって回答でした。一番最後に「あなたは日本語をどこで一番使いますか」という質問があつて。その時の日本語教室は、専門の先生が安く効率よく日本語を教えてください二年で、使える日本語を教える方針でした。いかに早く勉強して地域で日本語を使えるかを目標にしていた。でも、一番最後の回答、何だったと思いますか、どこで使つたって質問。ほとんどの回答はセンター(ここ)って書いてあつたんです。「ここです」って書いてある人は、地域で日本語を使つていない、使える相手がない。やるべきことは、話せる相手を探す方、日本語を教えるほうじゃなくつて。日本語勉強しても使うところがここしか無いってことは友だちがないんだから、友だち——いわゆる日本人とか、普通に私たちが地域で会つていそぐな人と、ここで会わせないとって考えたんです。それで、九人いた先生に、「九

教室あるから、一つだけこちらでやりた

い」と。皆さんのやり方はいい、やつて

それから、二〇〇一年にDV法ができ

て、DV相談が始まります。全国でいっ

ください。すごい満足度が高いから。でも一個だけ、先生だけじゃなくて地域の日本人がごちゃごちゃいっぱい来そうなの日本語教室をやつてみたいと、相談をしたんです。

そしたら年度末ぎりぎりになつて九

それから、二〇〇一年にDV法ができ

て、DV相談が始まります。全国でいっ

人が来て、「すいません榎井さん、全員やめさせてもらいます」って。寝耳に水状態になりました。つまり、一個つてなると、誰が辞めるのかつていうのが嫌だつたというのが一つと、全員辞めたら困るだろつて(笑)、そこではじめてあのとよなかにほんごつていう、今の形になつたんです。

そのとき協会は会場と、たまたま電話のラインが一個空いていたので、電話番号を提供したんです。相談日が終わった後から、ポツポツとDVの電話が掛かってくるようになって。必然的にDVの相談を始めないといけなくなつてしまつた。専門家がいなかつたので、私と具さん「元職員の方」が一個ずつケース

なんていうか、優等生な外国人を創る装置としてのとよなか国流にだんだん気がつてきたわけですよ。海外でお世話になつた人がお世話してあげるといふ「やり方が」、非常に教育的だつたりするわけです。南米の子どもは、コーラとか小さい時から普通に飲ませるじゃないですか。説教してましたね。当人にしたら習慣ですから余計なお世話ですよ。

スタデイをしながら手弁当のような形でやつていた。色んなケースがありましたね。一人、家族からの暴力で家に帰れないブラジル人のお母さんがいて。ブラジルで教育を受けてなくてポルトガル語の読み書きができない。世界が違うじゃないですか。文字の世界の人は抽象的な思考ができるので将来計画を立てることが

です。でも一生懸命で感情豊かで。毎日来るんです、でっかい荷物を持って。いくとこないから。毎日国流に来て、具さんとか気を使ってコーヒーを入れて、コーヒーを飲んで。エレベーターの前のタバコ吸えるところでタバコ吸って、散々泣くんです。ため息をついて、「はあー」って、帰っていく。で、また次の日来るんです。それが続くわけです。勿論相談されるので、こうしたらいいよとか、このためにはこういう風にしたらとか、あそこ行ったらとかアドバイスする。流石に数週間経って、何をやっても無理ということが解ってくる。

結局その人を矯正したいわけです、私たちは。ちゃんとしてあげたい。でもその人にとつて、欲しかったのは「ただい場所」だったんです。「こうしろああしろって言われたくない。いられる場所がほしい」って。その時、アンラーンっていうか、ここは外国人の場所のように見せかけて、実はそうじゃないんだと。外国人を日本的に、私たちが思うように矯正して地域に送り出すみたいな場所だった。

なんでその人がいる場所がほしいって言ったか。いい場所がない。要するに有徴なんですよ。そういう人たちは作っている。一つだけすぐわかったのは、公的な——「公的」ってなに？って話になるけれども——少なくとも外国人は公的な場所からは排除されている。単に外国人がいていい場所なんて一つもない。多分公民館にもいけないだろうし、図書館でおじちゃんたちと一緒に新聞を広げることも出来ないだろうし、公園デビューも出来ないっていうのも知ってたし、っていうことが、それはどういうことなんだろう？って。その国流って、私がある間に、本当に周縁化されたりとかマイノリティとか女性とか子どもとかって言いながらも、本当にその人たちがいい場所になつてるかどうかっていうのはやっぱりあって。いい場所ってこと自体をもうちよつと今は疑っているんだけど。まあそんなことかな。



金 僕が入った時にはそれなりに「いて

いい場所」の文化っていうのは出来たと思うんですよ。それも全然一筋縄では行つてなかったんやなっていうのは聞いてて思ったんですけど。

榎井 これもちよつと脇道に入ってしまったけれど、ふあよんにとつてはすごい大きなことで。やっぱり在日の職員がいたってことは大きかった。在日の職員は、見えますからね。隠れられないっていうか。そこでやっぱり体張ったと思います、彼はある意味自己投射して、弁護してましたから。女性のことに關しても、さっきの彼女のことに関しても、含めて。一番話し聞いてたのは具さんですからね。相手したのは。それはすごく大きくて。今は金さん「現事務局長の金相文さん」がいるんですけれど、やっぱりいることって大事なんですよ。

夏にあるセミナーがあつて、障害者差別法のことをずつとやつてきて色んな裁判をやってきた弁護士さんが同席している、私が在日の子どもたちの「いるのにいない、いないのにいる」話をしたら共感してくれました。これは私が外国人教

育の問題についてそういうフレーズを思いついたんです。もちろん「いる」。例えば学校の中に在日の子がいたとしても、いないように扱われる。あるいは、それを逆に言うと、もともと日本の学校なんだから、在日の子は「いない」はずだ、というところにいる。だから「いるのにいない」と「いないのにいる」は一緒なんです。その話をした時に、それはインクルージョンの、障碍を持つる子どもと全く一緒だと。いるのにいないとされる。いないはずなのにいるっていう。そこに隔離っていう話があるけれども、同じようなことが起こっているねっていう話でした。そこをおさえずに外国人の問題はできひんと思っちゃダメ。在日の問題と、目の前の、「言葉がでない」みたいな問題とを繋げないといけないと思っただけ。最近なんかこの、『レイシズム』『レイシズムスタディー

ズ序説』（鶴飼哲、酒井直樹、テッサ・モリス・スズキ、李孝徳共著、以文社、二〇一二年）にはまっけていて（笑）。これまさにそのことをずっと言っているんですが。結局つなげて考えないというの

は、為政者にとつて非常にやりやすいって話なんだなって。そっちに乗っかってるだけの話。結局それは何かと言ったら植民地主義だったりとかレイシズムであつたりとか。根っこはやっぱりそこにあるんだなっていう話ですね。

金 とよなか国流のスタツフと、ある被差別部落だった地域で活動されている団体の方と一緒にフィールドワークをしたんですが、ちょうど被差別部落だとされるところとそうじゃないところの境界、団地と向かいにある道路のあいだにフェンスがあつて。そのフェンスは、もう昔の話なんだけれども、こっちは私たちのところだと、被差別部落の人たちとは違うんだということを証明するためにあつたフェンスで。もう取っ払ってもいいんだけどおたがいの対話なしに無理やり行政で取っ払ってもしやあないから、今まで残してるんですという話があつて。境界でこそ排除するというのはつきり現れるんだけど、自分がすごく思ったのは、そこで対話がちゃんとなされて、やっぱりこれちゃんとはずさなあかんってなら

ないうちはそのまましておこうというのは結構だじやなという風に思つて。

いるのにいない／いないのにいるっていう話を聞いてちょっと思ったのはやっぱり、その人と話をあまりしないとか、その人をこっそり自分とは違う存在にしてすごいって思つたりとか、そういうこととつながつてると思いました。それは居場所がないということと関係するかなと思つたりするんですが。

榎井 もうひとつ思っているのは、居場所、これはすごく言葉を選ばないといけないんですけども、空間ではないって話なんです。

空間としての場所っていうのはすごく危なくて、さっきの話ですよ、どこまでが自分のものなのか。植民地も先住民もそうじゃないですか。場所を所有していくことによつて、あぶれていくものが居場所を、逆の意味で居場所を探していくっていうときに、居場所っていうのは、なんていうんだらう、場所の所有のアンチテーゼというか。次元が違つていて、安心できるとか、いいいいとか、

どう言つたらいいかわからないんですけれども、他者からの承認みたいなところが初めから剥奪されているなかで、それを取り戻すためにどういう風にしていったらいいのか、という一つの手段であつて。

マジヨリティは居場所つて使わない。居場所つて場所を追われている人たちの、場所へのアンチテーゼみたいなイメージの場所。なので、空間じゃなくつて。場所じゃなくつて吹き溜まりみたいな。「お前いた！」みたいな積極的な承認ではなく、「いて当たり前だよね」、みたいな、対話がなされる。「いるのにいない」じゃなくつて「いるのにいる」みたいな。そういう……なんて言つたらいいんだろう、空間ではなく。頭のなかでいま整理ができてないんですけれども。

金 僕自身が国流に吹き溜まつてるなどということをしごく思つていて。僕が関わっている「サンプルレイス」の活動もボランティアとして子どものために居場所を確保しているんだみたいな、そういうことじゃ全然ないですね。僕もそう

だし他のボランティアもそうで。どつちかというところと、子どもと一緒に遊んでるし、一緒に勉強してるし。そんな毎日毎日対話してるわけじゃないですけど、こぼれるつぶやきを拾つて、それをどうにかできるわけじゃないけどボランティアとみんなで話し合つて悩むとか。そういうことをずっと、三年続けてきて。結局なんか、使命感みたいなものを第一の理由にして国流に行つてないんですよね、自分が。行きたいから行つてるし、そこにいる人たちに会いたいから行つてるし、人たちがつていうのは子どももそうなんです。それは自分のそれまでのことを考えると、やっぱり場所がなかったな、という風には思ふんですね。

榎井 その時の場所つていうののイメージが、やっぱり吹き溜まるというか、ちよつと絡むというか。色んな物に絡まれている自分がこうあるとか。空間としての場所ではなくつて、こういう子どもがいて、なんかちよつとこう自分が絡んでいて、それぞれ居場所つて一個じゃなくつて、全然違つて。たとえば

私はふあよんと今しゃべりながら、ふあよんはここにいるな、つて。なんか、このへんにあのいるよね、みたいな。わかるでしょ？ この人はこのへんにいるよね、こつちいるよね、みたいな。だから、事業です、とか、国流はこういう組織です、とか言つたらもう絶対壊れちゃうみたいな。

でもそこにあるよね、何であるのかなつて言つたら、たぶん歴史だと思ふんですね。歴史と文化。それはたぶん、さっき言つた、DV被害者もそうだし具さんもそうだし。私もきつとアクターだつたと思うし。そこにできた、なんていうんでしょね、国流つていういわゆるプレイスとかいう場所ではなく、なんかその、ものが絡みそうなところ、みたいな。スポーツとか渦というか吹き溜まりというか。そんなものがあるよねつていうのは、思えるかな。それはたぶん、色んな人たちの色んな思いが複雑に絡んで作つてきた、ひとつの文化みたいな感じが。

井筒 吹き溜まりつていうことばに、私

もすぐ共感をします。私は大学を出てから、いわゆる自立生活支援センターという、脳性マヒを中心に障碍をおっている人たちが、地域で活動するための支援をするNPOにいて。そこが、まあ吹き溜まりって言えば吹き溜まりだったんですよ。その設立をした方も、なんで設立したかって言ったら、地域の障碍者が溜まる場所が欲しかったからつくったと。

僕自身去年はそこで働く日が一日とか二日とか週にあっただんですけど、それまでは基本的には直接在宅の人の家に行って帰ってくるという仕事をしてたんですよ。それはやっぱりきつかったです。誰かとはいるんですけど、独りだなんて感じる時がすごく多かったですよね。で、その、皆が集まって飯食べて、外出活動するための計画を立てたり、次のイベントをする計画を立てたり、そういうことをやりながら、ほんとに何もしない時間もあって、そういうときは利用者さんとふたりでタバコ吸いながらはあみたいな、昨日テレビどうだったみたいな話をしたりとか、恋愛相談をしたりとか、

しながら回っててっていう時間が楽しかったし、やっぱりすごく安定したんですよ、僕も。去年一年間ははつきり言って生活は厳しかったんですけど、そういう場所が確保されてただけで、すごい安定して楽しく過ごせたんですよ。

やっぱりそれっていろんな説明の仕方があるとおもうんですけど。僕は、やっぱりヘルパーではあるんですよ、当然その仕事はするんですが、ヘルパーとしての仕事はしてないですよ。友人であったりただ横にいる人として、ちよつとアレ取って、ちよつとトイレ行くから手伝って、タバコ吸うから外出できて、はいはい、っていう感じでやると。それは、なにか明確に何かやることがあって、それを達成することじゃなくて、その場その場で起こったことに、流れに乗ると。それはほんとに、ヘルパーと利用者の関係のみがそうであるというわけじゃなくて、利用者同士もそうだし、ヘルパー同士もそうだしっていう、何をやってもいい空間で、楽しく日々を過ごすという場所がい箇所出来たってことで、やっぱりすごい救われる感じがしたっていうのは

あって。

榎井 なんかつたぶん、居場所って場所のオルタナティブだと思っんですけど、絶対に。吹き溜まりって言ったんですけど、吹き溜まりのいいところは多分、なんて言うんでしょう、この人は何者とか聞かなくて済むとか、私は何者ですって言わなくて済むとか、ここに来たらこうしないといけないことがないとか。それってなんだろうって考えたら、そうじゃない関係っていうのは力が働いてたりとか、私はこういう者ですって仕事をしないといけないとか。やっぱりそういうことから解放されるっていうのを、特に普段、力に無自覚の人は解放されないままにいつもの場所にいると思っけれども、そういうことに自覚的というか、それを感じざるをえない人たちにとっては、やっぱり必要な場所なのかなっていう感じがしますよね。

金 サンプルに來ているある子どもは、最初センターに繋がったのは日本語だったけど、たまたまサンプルのボランティア

アと繋がるようになって。日本語も行きつつサンブレにも来るようになって。二〇一〇年に初めてやった「たぶんかミニとよなか」で、本格的に子どもと一緒に出来たに何かするっていうことを一緒に出来たと。そこからは毎週毎週、ボランティアよりも休みなくサンブレイスに来るようになって。そういうことを見ると、事業としてサンブレっていう場所を取り敢えず居場所づくりの活動って言っているけれど、サンブレが居場所なんじゃなくて、センターとか、とよなか国流の人たちっていう、もうちよつと大きい括りで居場所になってるんやなと思うし、そういう風子どもを色んな所につなげてみたりとかするっていうのを、僕は去年一年、仕事をみんなと一緒にやってみて、本当にそういうことに気を配って意識的にやってるんだなということは、よくわかったことなんですよね。



金 一方で、例えば今の日本語のボランティアさんの人たちとか、どこまで日本

語のその活動以外のところとつながってるのかというのは、結構難しいところがあるなと思って。だからこそ、哲学カフェとかさんかふえとか、そういうところを創ってみるっていうのは、子どもがそういう風に色んな所につながって、協会全体を居場所にしてくれる、っていうのと、またちよつと似てるというのか、さんかふえを通じて別の事業とか別の人のつながりが生まれたりするのかなっていう風に、今話を聞いててちよつと思っただけですけど。どうですか？さんかふえとかって、国流のなかではどんな風に位置づいていますか？

榎井 多分、今日本語事業の話をしたんだけれども、日本語事業はまず形から入っているの、形から脱出できないというか。だからモヤモヤとした、藻場みたいなところがほしいなっていうのがあって。

で、さんかふえみたいなのを創ると、「そこに来れる人が来る」のは、結構面白いって。混沌とした場作りっていうのは、ほそぼそとずっと続いていて。哲学

カフェもさんかふえも。そこをすごく大事に思ってる人たちがそれぞれ違っているっていうのがまたいいなって思ってますね。うん。やっぱりそこに、それを求めたりする人っていうのは、気がついていく人であって。いま、じゃあ日本語ボランティアに「さんかふえ出なよ」って言っても、義務になるという部分で。やっぱりこう、行きたいとか、居てたいとか、話したいなとかっていう人が、ぜんぜん違う部分から来る。どれだけそういうところを増やしていくかみたいなところが勝負なのかな、っていうのは、思っていますね。

で、子どもはなんでそういう風に行ってるかっていったら、やっぱり、うん、その子たちがそれなりに乾いているから、だと思っただけです、乾いているっていうか、うん。まあ求めてるって言えば求めてるかもしれないし、乾いてるっちゃ乾いてるかもしれないし、奪われてるっちゃ奪われてる。



榎井 目的とか効果で測れないものがあるよねって言うふうになるには、誰が周縁化されていくのかっていう発想を、すごいもった時期があつて、で、そこからなんかこう、いろんなことを考えるようになった。

国際交流センターは役所の施設なんで、「きれい」でないといけないみたいなイメージ。でもわざと、古いものが貼つてあつて。マイノリティのグループが何かやつたとして、それをずっと飾つてくつていうことは、そこに居ていいっていうしるしだったりするわけ。そういう意味で、手垢をふかない、っていうか。柱の傷とかなんかそういうのをわざと残していく。センターの汚さというか、なんともしえない(笑)。なんかそういう、居ていいよみたいなメッセージっていうのがあんなかで、子ども事業が「効果は測れないよね」っていうところまできたのかなつて。それでいいと言ひ切れる文化ができてくるというか。でも仕分けしたら一発、みたいな。ふふふふ。

うん、だからそういう意味での、なんかあそこの文化っていうのができてき

て、だからたぶん哲学カフェとかさかふえとか、人数の問題ではせんせんなくつて、でもつづくよねっていうのが、私的にはすごくきもちがいいというか。「これ国流でどういう意味があるの」とかつていわれると、うつ、て詰まりますけど。

金 説明しづらいつていうのがね。

榎井 うん。でもなんかその……しづらいのを、たくさんつくつちやつて、こちのものにしよう、みたいな(笑)。これが当たり前ですみたいなことをいえないちばん、いい。新事業があつてもいいけれどもやつばそこにもつといっぱい、余白がないと、だめよね、みたいな。

ただ、そればかりでは、どうしても説明の責任にええられない。たとえば税金を使うときに、「いやー評価できないんすよー」とか、「やーどうでもいいんですよ」とは言えないし。だからその外、肩のまわりに、すき間や余白をつくつていく。それをつくることで中も、すこし健全になるみたいなものなんじゃないか

な。今ある場とか今ある現実みたいなものに、やつぱり、へりとしてくつついていする必要があるっていうか。

そこがないとたぶん、そのこの行き来もできなくなるというか。うん、たぶんそこだけにいてもだめなときがやつて来る。そこにだけ居てもいいけれども、でもたぶんそこで力をためて、また、現実たとえば子どもだつたら学校という現実があるじゃないですか。現実としての学校や社会とかつていう仕組みは、やつぱり無視はできない。そこでやつていくために、そういうところが必要。とくに、社会的に力が無かつたりとか削がれてたりつていう子たちにとっては、ああこういうところが必要なんだなつて。

現実とか社会とかいわれてるとことは、まあ、なくならない。でもそのまわりに、なんかこう作つていくのは、もつともつと必要であつて、もつともつとそこで居ないとされてる子たちが、なんとか落とされたパワーをもう一回もつてなるとか社会にいうよ、みたいなのはあつてもいいのかなと。障碍を持つている人たちもたぶんそうだと思うし、介護

を必要としている人とか、徘徊する老人とかもそうだと思うけど、いわゆる社会的に居ないほうが楽とされている人たちが居るために、居続けるために必要な力とか、安心感とか、居ていいんだとか自己肯定感とか承認とか、自尊でもいいんですけども。なんかそういう、なにかその、しくみが、居場所なのかなっていう。

金 うん……。そうですねなんかこう……、うーん、出て行ってまた戻ってこれるっていうか。

榎井 うん！ 余白をすーっと旅しててもいいと思うんですよ、子どもとかね。どっかでなんか中入ってもいいし。そのまんま行ってもいいし。

でそういうなんか、その世界も認めてほしいってのがたぶん、居場所って言うんだと思うんです。いろんな人がたまり場をつくったとか居場所をつくったっていうのは、たぶん、そこを認めてほしいって何かがあるんだろな。でたぶん、中の人たちが、やっぱり変わってほしいって思うわけじゃないですか。

なので、対話が必要、ていうのが出てくるのかなっていう。



金 これ、訊こうか躊躇ってたんですけど……。

榎井 どうぞ。

金 とよなか国流っていうばしよは、榎井さんにとつて、居心地のいい場所になつてたかな、とか。それかどっかにやっぱりほかの場、とか、あつたのか……。

榎井 いや、他はなかったんで、居心地がいいっちゃいいかもしれないけどなんか、すごいあそこは闘いの場だった。闘いの場っていうのは、「女」みたいなことを思い知らされたりとか、社会的な権力的なところと接点があつたりとか、市民からの突き上げがあつたりとか、外国人も仲良くなればなるほど、「あんたは日本で生まれてこんなんだし」みたいなものもあるし、自分がいろんな意味で確

認できた場所。居心地が悪くはなかった。自分の中のマジョリティ性とマイノリティ性がよく見えた場所です。つまり誰を前にして語るのかによつて、まったく違う自分が見えてくる。でもよかったのかなあ。悪かったのかなあ。どういうのが居心地がいいっていうのは分からなくつて、私の居心地のいいっていうのは、なんか、ずつといるんことが考えられるとか、ずつとなんかこころ怒いつてられるとか、ずつとけつこころ闘いつてられるみたいなのが、いいのかもしんないなつて。社会がみえるとか世界がみえるっていうのはすごいおもしろかつたですね。

あと私は、神奈川県出身なんで、同じような場所にしても、なんかその、こじんまりとしたよさっていうか。神奈川県とか東京つて相手がでつかすぎて、歯がたたないっていうか。ある一定自分が自分の足でいるんなことができたりっていう意味ではすごいとよなかおもしろかつたですね。

役所からも、教育委員会からも、一目置かれてたりとか、発言権があつたりとか。そういう意味ですごくおもしろい

というか。なんかやつぱり、変な意味じゃなく人間で政治的なんだなって思っていますね。たんに居場所だけをやってる、つて人たぶんいなくて対局、対抗するような勢力とか、主流とか、なにかあって、そこにアンチ的にやってると思うんですけど。私にとつたら、このとよなかをやりながら、何が社会といわれているものなのかっていうのがすごくよく見えて、おもしろかったですね。

構築主義とか、カルチュラルスタディーズの人たちを呼んで「アンラーンシリーズ」を企画したときにぐわーっとのめり込んでそれといまの自分たちの置かれてる場所とか自分自身とかっていうのはわりとすつぱりあてはまっていきながら事業を展開していったのであんなふうになつたんだらうっていうかんじですね。だから、居てて、まあそういうのかなか悔しいとかなんちゃらかいっばいあつたけれども、居心地の悪いことはなかった。うん。充分におもしろかったですね。

それといっしょにほんとに現場の、子どもたち見て、頭を悩ませ。子ども事業

できたいろんなこととかDV被害者の話とか、いっばいおどろおどろしく現実はあるわけで。うん、その、なんのためにやってるかっていうあたりも、絶対ぶれないというか。あそこにいいたら。

なんか、ものがうまくいかなければいけないほど、おもしろいというか、これはほんとに社会だなあと。不条理なことがあればあるほどそうだなあと。

井筒 現場にいてることでぶれない……ばくもぶれなくなりたかった、いまでもなりたいんですけど、やつぱりその、ぶれないためには場はあるなとすつと思つて。よくにとつては介護をすつとやっていくことがたぶんぶれないためにはすごい重要で。

何かとして型にはまらないっていう場が必要だよって話が出ていた一方で、自分自身としてはどこかでやつぱりぶれない、というか、なにかやりたいということはあるわけですね。

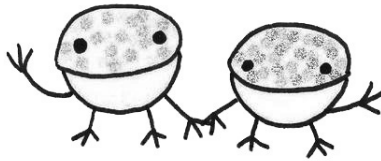
榎井 うん、いやまさにそうだと思うんですね。

たぶん、子どもたちのパワーっていうのは、私は居るよっていうところに最後のくと思うんですね。学校の中に自分は居る。で、そこで、ぶれないっていうとおかしいけど、そこで自分が自分でありつづけられるために余白とか、居場所とか、うずまきとか、たまりばとか、吹き溜まりとかっていうのはたぶんあるべきなんだろうなっていうのは思っていて、もしかしたらその、これって現代的、近代的なことかもしれない。その辺は私はちゃんと勉強してないから分かんないけど。

金 自分が自分でありつづけるといいうのは、自分の矛盾っていうのに正直でいられるとか、なんかそういうことなんかなーと思つて。ぶれないっていうのも、こう、何かをするために、なんか自分を抑圧してがんばるっていうのとはまた、なんか、ちがうかな、と……。

榎井 うん、逆だと思う。逆だな。ぶれないっていうのは、自分、が、変わつてもいいんですよ。変わつてもいいけれども、「魂売らない」みたいな。

うん、あの、たぶん売りたいくなる感じが
いっぱいある。あるじゃないですか。で
も、いったいじゃあなんのためにやって
んの、っていったときに、いろんな具
体的な人の顔がちゃんと出て来るとい
うか。やっぱり自分の生きてきたなかで出
会った人、なんですよ。社会問題とい
う漠然としたものがあってこれはおかし
いとか言ってるわけじゃなくて、なんで
あの子はあそこで死なないといけなかつ
たのかとか、もう、もうほんとに具体的
に、そういう話、なんです。なんかそ
ういうことちゃんと大事にしていける自
分でいたいなっていうのすごい思います
ね。



とよなか国際交流協会の様々な活動に関しては、ぜひホームページ
(<http://www.a-atoms.info>) や Facebook ページ「とよなか国流」
をご覧ください。

ちなみに、本インタビューに登場してくれたのは、とよなか国際交流
協会のキャラクター、コモとスースです。実際に国際交流センターに
行くと、いろんなコモとスースに会えますよ。

インタビュー後記

今回のインタビューのお誘いを受けた時、テーマが「居場所」であると聞いて二つ返事で参加を了解したのは、そのときの私にとって「居場所」という言葉から想起されるものがいくらか鮮やかなものとしてあったからだった。そうであったはずなのに、その後改めて「居場所」について考えようとしても、不思議とあまり多くのことが思いつかない、ということがあった。その時は、なぜ自分がそうなのかが、よくわからなかった。／ただ今回のインタビューをとおして、この、私が「居場所」をあまり良く語れなかったことの原因がすこしわかったような気がする。それは、榎井さんと金くんにあって、私にはないものとして、インタビューのなかに、あらわれている。／お二人には、「私にとっての居場所」に加え、「あなたにとっての居場所」、「彼／彼女にとっての居場所」という視点と、居場所をつくる・まもるという意志と実践があったが、私にはそれらがなかった。言ってしまうえば、私には、「私にとっての居場所」を享受したという経験しかなかったのだ。居場所という場、あるいは状態の脆さや（字義通りの）有り難さを、単なる偶然的産物だとしか捉えてこなかったのである。たしかに「私にとっての居場所」というものをとおして、私は、自信やよろこびを受け取った経験はあった。しかしその鮮やかな感覚も、どこか、喉元すぎれば、という感じで色あせてしまったのだろう。このように、私の居場所という視点しか持ち得ないと、居場所を消費してしまう危険、というものがでてくるのかもしれない。／最近になって私も、居場所をつくる活動にいくつか参加するようになった。そのため、お二人が格闘しておられた居場所というものをその存在の特性に応じた形でいかに育むかという課題が、私にとっての課題にもなりつつある。おそらくこのことは、私に新しく居場所を語る言葉を与えてくれるだろう。そうなった時にまた、今回のようなお二人とお話ができる機会に恵まれれば、と願っている。（井筒）

このインタビューで、榎井さんが長年にわたってとよなか国際交流協会実践されてきたことのエッセンスがお伝え出来たかと思います。／特に印象的なのは、「居場所は場所ではない」という言葉です。居場所をつくる・居場所になることは、場所の占有の問題ではなく、居場所とは承認の場であり、承認されることのうちに居場所はあるのです。とよなか国流が、センターを常に外国に繋がる人びとの承認の空間としてひらいてきたことが榎井さんの言葉には表れています。／また、「現実」の「肩」に余白を作っていくという発想も大切に感じます。「吹き溜まり」は「現実」から完全に分かれたものではなく、「現実」と自分自身との関係をとらえなおす場所、また継続的に力になり合える人間関係をつくる場所にもなるでしょう。生活時間の大部分を占める場所で生き延びるために、完全に切り離されないその「肩」に吹き溜まりが必要なのです。／余白をつくり維持することのたいへんさと、それでも長年「ブレない」活動を支えてこられた榎井さんのパワーが、インタビューから伝わってきます。そして、自分の「在日コリアン」ということにそれなりにこだわってきた私がこのインタビューでもらった元気は、今も私のどこかで脈打っています。（金）

安心できる居場所のための

ミニブックレビュー

川崎唯史

居場所について考えるとき、ヒントを与えてくれるものはいくつもある。書物はその一つである。ここでは、私が読んできた本の中心から二冊を紹介したい。いずれも、「浦河べてるの家」というユニークな場所から私たちに宛てられた書物である。

◇浦河べてるの家

- 浦河べてるの家とは、「北海道浦河町にある精神障害等をかかえた当事者の地域活動拠点で、一九八四年に設立された。社会福祉法人「浦河べてるの家」（多機能型の就労・生活サポートセンター、共同住居とグループホーム十四か所を運営）、有限会社「福祉シヨップべてる」などの活動の総体」である（『技法以前』、一四六頁）。今回紹介する二冊の他、『べてるの家の「当事者研究」』（浦河べてるの家、医学書院、二〇〇五年）や『安心して絶望できる人生』（向谷地生良・浦河べてるの家、NHK出版、二〇〇六年）などの書籍に加えて、『ベリー・オーディナリー・ピープル予告編 その一〜八』（ベリー・オーディナリー・ピープル制作委員会、一九九五〜九七年）などの映像作品もある。

『べてるの家の「非」援助論——そのままいいと思えるための25章』
（浦河べてるの家、医学書院、二〇〇二年）

浦河べてるの家は数多くのキャッチフレーズで知られるが、その中でまず注目したいのが「昇る生き方から降りる生き方へ」である。例えば、統合失調症をかかえる松本寛さんは、人一倍がんばって他人と競い合うことをやめられず、その「昇る生き方」に苦しんできたが、浦河赤十字病院に入院し、べてるの家に会ったことをきっかけに、「がんばり」から降りられた」という（一三五頁）。こうした「降りる生き方」を支えているのが「弱さの情報公開」である。「弱さを絆に」という理念を掲げるべてるの家には、人間のもつ弱さをそれ自体で意味あるものとして積極的に評価する「弱さの文化」がある（一九八頁）。それぞれの弱さを明るみに出すことによって他人に手伝ってもらえるようになり、つながりが得られるのである。

誰も無駄な人はいない。長い距離を走る人も、短い距離を走る人も、そこには優劣はない。自分の走れる距離を覚え、それをまわりに伝える力さえあれば、一歩だけでもバトンは確実につながっていく。「弱さ」とは、いわば「希少金属」や「触媒」のように周囲を活性化する要素をもっているのではないが、人

のもつ「弱さ」は、けっして劣った状態として、人の目をばばかり、隠されるべきものではない。へてるでは、弱さとは、公開されてはじめて威力を発揮するものとして尊重されている。だから必要なのは「弱さの情報公開」である。(一九二―二三頁)

次に注目したいキャッチフレーズは、「三度の飯よりミーティング」である。全体の運営ミーティングからSA (Schizophrenics Anonymous: 統合失調症などの経験者による自助グループ) ミーティングまで、へてるの家ではさまざまな種類のミーティングがひと月に一〇〇回近くも開かれている。ミーティングを重ね、「話し合う力」を育てることは、へてるの家の活動を支えてきた「ただ一つのこと」とまで言われる(九二頁)。

そんなメンバーの過去の挫折や行きづまりを見てみると、彼らが「関係」に挫折してきたことがわかる。それは他者との関係であり、自分との関係だ。／だから関係に挫折し自信を失ってきた一人ひとりが、持てる力を発揮するためには、「関係」において回復し、関係のなかで自信をとりもどしていくしかない。その意味で「ミーティング」とは、問題を出し合い解決する場ではなく、傷つき、自信を失いやすい者たちがお互いを励ましあうプログラムとしてある。(九四頁)

へてるの家のミーティングにはSST (Social Skills Training:

生活技能訓練) と呼ばれる認知行動療法が取り入れられているが、重要なのはSSTという手法よりもむしろそれを支える「場の地力」であるという(一七七頁)。居場所づくりの観点からみて興味深いのは、場の地力を高めるための重要なポイントとして、「当事者と職員間のコミュニケーションの一元化の問題」が挙げられていることである(一七八頁)。「一元化」とは、当事者と職員間のコミュニケーションと職員同士でのそれと同じやり方で行なうことを指す。なぜ一元化が必要なのだろうか。

つらいことの多かった人間関係やいままでの暮らしに対する後悔や恐れ of 感情をそのまま受け入れ、当事者に対して成長的な新しい人間関係の土台を提供するのが専門職の役割だとするならば、そのような重くストレスフルな課題とつねに直面することを仕事とする私たち自身が、どのような関係によって支えられているのかを知ることがまず重要である。(同頁)

このようにへてるの家では、当事者だけでなく職員も弱い存在としてお互いに認め合い、対話の中で弱い自分をそのまま表現することを重視している。もつとも、それは弱さとして表現された問題が解決されることを意味しない。まったく逆に、職員でさえも「へてるに來れば病気が出る」という。しかしこれは否定すべきこととして捉えられていない。弱さが病気として露呈することは、強さを偽装して一人ががんばることで覆い隠されてしまう自分自身との率直

な関係を可能にするのである。牧師としてべてるの家に赴任した濱田裕三さんは次のように述べる。

「へてるにかかわりや病気が出る」——かつてはこの言葉を他人事のように聞いていましたが、いまでは「たいしたことのない」自分自身のテーマとしてここから笑って聞けるようになりました。「病気」を出し、素の自分と向き合えば向き合っほぐ、自分のことを「かけがえのない存在」と思えるようになってきました。(一七三頁)

当事者と職員が自らの弱さをポジティブに公開しながら何度も話し合い、日々のミーティングや事業においてお互いに支え合うといふべてるの家のあり方は、成果を出すことや問題を解決することを目指さないような話し合いの場を考えると、多くの示唆を与えてくれるだろう。

『技法以前——べてるの家のつくりかた』

(向谷地生良、医学書院、二〇〇九年)

本書は浦河べてるの家設立以来、ソーシャルワーカーとして、また実践の紹介者として重要な役割を果たしてきた向谷地生良の単著

である。たくさんの刺激的な主張が見られるが、ここでは第四章で論じられる「聴かない」という聴き方」に絞って紹介したい。

鷺田清一が哲学にわたっての「聴く」ことの意義を取り上げたことを受けて、向谷地は「ケアの現場は、聴きすぎた」のではないかと大胆に問題提起する(八七頁)。より正確に言えば、向谷地が問題視しているのは聴くこと一般ではなく、技法として半ば形骸化した「傾聴」である。傾聴は基本的にスタッフと当事者間の一対一で行われ、当事者の感情に焦点を当てるものとされるが、これはつかの間の充足感や慰めを与えこそすれ、当事者の困難な現実を変えることはないため、結局は不全感や孤立感を残してしまうと向谷地は考える。これに対してべてるの家には「聴かない」という聴き方があるという。この聴き方は「共に聴く」と「一緒に考える」という相互に関連する二つの側面をもつ。

まず「共に聴く」とは、ミーティングなどにおいてスタッフだけでなく他の当事者たちも聴くということを指しており、当事者と援助者の出会いはこうした共同体への入り口として捉えられる。これは当事者とスタッフ間の「閉じた聴き方」に対して「開かれた聴き方」とも呼ばれている(一〇八頁)。

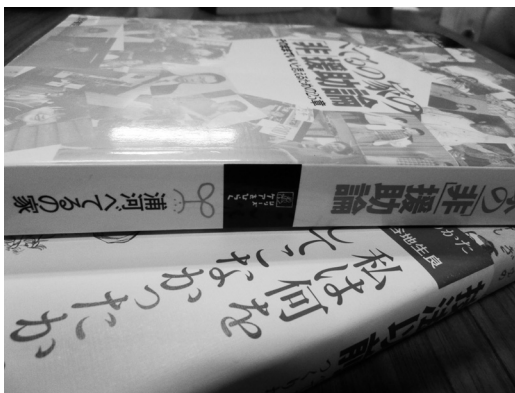
次に「一緒に考える」とは、当事者の抱えている苦労に対する現実的な対処について共に考えることを意味する。ミーティングは苦労を感情として受容し慰める場ではなく、「新しい肯定的な現実を共有する場」なのである(一一〇頁)。このことを当事者の西坂自然さんは「向谷地さんに話すと、自分の問題の対策本部」ができ

たよつな気がしてとても心強くなります」と表現している(一一三頁)。話し手と聴き手を固定しない「一緒に考える」という関係は、「研究的な対話関係」とも言い換えられる(一一七頁)。そこで重要なのは、やはりお互いの弱さへのまなざしである。

共に考えること、それは当事者と共に現実の困難に連帯しながら、同じ苦勞の目線で、「同労者」として歩もうとするあり方である。私は、この「聴く」という関係のもつ可能性の一つに、「共に弱くなること」があるような気がしている。別な言い方をすれば、聴くという行為は、当事者のかかえるさまざまな困難な現実には、「共に降りていく」「プロセスとしてある。その降りていくことを具体的に実現するうえで大切なのが、「共に考える」関係——研究的な対話関係——である。(同頁)

向谷地にとって、「対話」とは、一人の人間としてそれぞれの弱さをもっていることを自覚しつつ、上からでも下からでもなく同じ目線で誰かの困難な現実への対処を考えることなのである。こうした意味での対話を必要とするのは、障害と名指される困難を抱える人たちだけではないだろう。たとえ健常者とみなされていても、人は誰しも弱く、何らかの困難を経験しつるのだし、かえってそのことに気づきにくくなってしまっているかもしれないからである。お互いの弱さから出発する対話というべてるの家の実践は、人々が集まる居場所を考へるとき、私たちに大切なヒントを与えてくれる。

かわさき ただし
大阪大学院文学研究科臨床哲学研究室博士
前期課程。国際交流センターや病院での対
話に参加している。



た。しかし、本当にいじめられていたんだろうか。その疑問は誰に届けたらいいのかわからないまま、その場に捨てられていた。彼は私の話にも、どんな反応も示さず、ただじっと君を凝視している。その目はこう言っている。「なぜ、先生は僕がいじめられているのを止めてくれなかったのか？」彼と、私との間には、深く、無限に続く深淵が口を開けていた。誰かがいじめられている。それを止めることができない無力さ。深く傷ついた人を受け止めることができない無力さ。そして、いじめられなくなった成功者を気取ることしかできない自分の矮小さ。やっぱりおれは弱いままだったんだと、永遠に続く沈黙の中で、そう思った。

——— どういうことなんだろうなあ。一体、強いとか、弱いとか、いうことは。———

中島敦『虎狩』

えもんのキャラで統一しようぜ、誰かが言った。じゃあ、中川君は大きいからジャイアンでいこうか……。名前は人を変える。のび太くんからジャイアンへ。いじめられっ子からいじめっ子に立場を強制的に変えられたその瞬間、目の前に可能性に満ちた世界が拓けた。

笑われたくないから、ゴリラと言われて怒って走り回っていた。いいじゃないか、笑われてれば。開き直って、腹を抱えるくらい笑かしてやればいい。「ゴリラ！」と言われたら「ゴリラの握力なめんなよ！」と答えるようになった。「テンパ！」と髪質を馬鹿にされたら「おいおい、試しにペン差してみろよ。微動だにしないから便利やぞ！」と答えるようになった。どのリアクションも、ことごとく笑いを引き起こした。そんなことをしていたら、気づいたらクラスの中心にいた。うれしかった。自分がそこにいてもいい、ということが認められたような気がした。

通学路が長くなったので、毎日、汗だくで歩くようになった。日ごとに身体が締まっていた。部活を始めた。筋トレをしたり、外周を走ったり、そんなことをしてる内に、自分が意外と足が速いということに気づいた。腹筋が割れ始めたあたりで、ぼんやりとした自信が確信に変わった。もしかしたら、強くなれるのかもしれない。

☆

小学校のときに自分を挑発していた連中ももちろん中学にいた。生徒数が多く、大きな学校だったので必然的に会う機会も少なく

なっていた。ある日、渡り廊下で、奴らのうちの一人とばったり出くわした。秋口で、夏から残された日差しが渡り廊下を截然と照らしていた。何を思いだしたのか、奴は微笑を顔に浮かべ、以前と同じ表情で「ゴリラ！」と言い放った。腹が立ったわけではなかった。恥に押しつぶされたわけでもなかった。

周りには誰も居ない。今ならいけるかもしれない。思った瞬間に走り出していた。皮肉な微笑を残したまま、奴も逃げる。易々と、相手との距離が縮んでいく。夢にまで見た、手が届く距離に詰め寄ったとき、背中を強く、世界に復讐するように強く押しした。相手は足がもつれ、倒れ込む。捕まえた。まるで百年もこの機会を狙っていたように、獣のように襲いかかる。「すまん、すまん。もう言わへんから」。謝ってもらいたかったのではない。何も言わず、溝うちに一発、くれてやった。苦しそうなうめき声。てっきり嬉しいとばかり思っていた。誇らしいとばかり思っていた。自分を挑発する相手を殴り飛ばし「おれのほうが強い」と突きつけること。そこには何もなかった。無意味、それだけが待ち構えていた。残骸を後に歩き始めたとき背中に捨て台詞が届いた。「足が速くなったから、もうからかえへんな」。「からかう」という言葉が耳についた。

☆

話し終えたとき、窓の外は漆黒の闇に閉ざされ、世界は暗闇の底に沈んでいた。私はいじめを受けていた人を代表したつもりだっ

なっていく。周りの人たちの困ったような顔と、なんやこいつという視線が刺さる。どうも後ろの奴が借りていただけだったらしい。そんなつもりじゃなかったという顔に向かって「お前が、お前が」と泣きながら、訳の分からない言葉を繰り返していた。すまんかったという声が耳に入らず、お前のせいやと叫んでいた。チャイムが鳴った。泣いている姿を誰にも見られなくなかった。なんとか涙を拭いた。先生が入ってきたとき、何もなかったふりをした。ただ、目は真っ赤だったはずだ。

☆

そういえば、担任の先生から会議室に呼び出されたことがあった。誰がチクったのか、奴らといっしょに昼休み、呼び出された。どんなことを言われたり、されたりしているのかと取り調べられた。そのときに感じていたことは、先生に助けてもらえそう良かったとか、これで楽になるかもしれないとかいったことではなかった。ただただ恥ずかしかった。終わることのない恥の感覚。「ゴリラと言われます」。ほとんどそれしか言わなかったような気がする。弱虫だということが先生にもばれてしまった……先生にも馬鹿にされている。もしかしたら、親にもばれているのかも。兄貴にも、妹にも。弱い自分が悪いのに、という罪の意識が自分を捕らえて放さなかった。奴らに謝られた気もするし、謝られなかったような気もする。ゴリラという嘲笑が、止まるはずなどなかった。

☆

ひどく晴れ渡っていた、と記憶しています。猫背でとぼとぼと歩く、あまり人通りのない時間帯の家へと戻る道。記憶の中では、そんなときに限って誰とも帰らず、牛の匂いが鼻につく道を歩いているのです。足下を見ながら歩いていると、今日もまた学校で涙を流してしまったことが、忘れられない。ただ、恥ずかしかった。もしかしたら、誰かが家族に「今日もいじめられてたみたいだよ」と伝えているかもしれない。そう思うと、家にも居場所がないような気がして。

狭い路地を通り、国道に抜けた後、工務店の横に高いビルがありました。家からも足が遠のく日には、自販機を見るふりをして、そのビルの屋上を見ていました。とてつもなく、高かった。そして、そこから飛び降りて、ぐしゃっと潰れてしまうことを夢見ていました。死の可能性について考えることは、とてつもない不孝をしているような気がして怖かったけど、自分を拒絶する世界に復讐できるかと思うと、とても快かったのです。

☆

中学生になって、色々なことが変化した。中学校は、四つの小学校がひとつになるマンモス校だった。自分のことを知らない人がたくさんいた。初めてのホームルームで、グループ活動をしていたときに、あだ名を決めようと誰かが言い出した。じゃあ、全員ドラ

ある一点で、卒然、自分のプライドがその状況を許せなくなる。「お前ら、ふざけんなよ！」叫びながら、走り出す。いきなり走り出したら、もしかしたら捕まえることができるかもしれない——殴ったる、絶対殴ったるからな。——もう、その時には目には涙が溜まっていた。追いかけてなくても情けない。追いかけて始めるとなお情けない。さらに悲しいことに、クラスで一番足が遅かった。

☆

四人くらいを追いかけて走る。追いつけるはずなんかない。泣きながら走る。ゴリラ！という声は続く。届かない。教室から始まった闘いは、職員室を除いたすべての場所に延びていく。中庭を走り抜ける。白、赤、黒の鯉たちが悠然と泳ぐ池のある中庭。下級生たちもところどころで遊んでいる。その中をゴリラと馬鹿にされながら走る。妹も混じっているのかもという不安は常にあった。両側に校舎があり、どこからでも丸見えだ。兄貴も見ているかもしれない。給食室の前を駆け抜けて、図書室で相手を追い詰める。がたん！と扉を押し開けて入ったので、図書委員の下級生たちが驚いている。本を読んでいる人たちのたくさんの視線を感じながら、追いかける。机をうまく利用して逃げられる。相手が押しどけた机の角が太ももに直撃する。「足おそ！あほちゃう！」そのまま、どこへいったか分からない。誰もいない校舎の裏を奴らを探して歩き回る。感じていたのは、恥だった。なんて自分は弱いのか。どこをとってもも

弱い。しかも、それをみんなに見られてる。追いつけない。おれは誰にも追いつけない。チャイムが鳴って、教室に戻る。そこにはいつもどおり賢く整列した奴らが、にやにやして待っている。授業が始まったら、お互いに手出しはできない。そんなことがほとんど毎日続いていたと思う。人間はずいもので、その時期の記憶はほとんど残っていない。

☆

なぜあんなにすぐ涙がとまらなくなったんだろう。涙は悲しいときにだけ出るわけではなかった。恥ずかしいときにもすぐに目が真っ赤になった。先生に当てられて発表したのに間違っていたときに涙が流れた。腹が立って、怒りが止められないときにも、涙が溜まり始めた。涙が出る度に思ったことは、自分はだめな奴なんだということだった。周りのみんなが強く見えた。自分だけなぜこんなに弱く生まれたのか、親を恨んだ。

☆

「いじめを苦にして自殺」という報道が盛んにされていた。そのときに、ああ、そうか、おれもいじめられているのか、とすんなり納得してしまった。その日、赤い国語辞典が机の上になかった。さっきまであったはずなのに。どこにいったんだろう。頭が混乱して、涙が止まらなくなった。どうも叫んでいたらしい。「なんで、おればっかり。なんで、おればっかり」。だんだん、舌がまわらなく

強いとか、弱いとか、ということ

中川雅道

きつい西日が我々を照らし、そのあまりの直截さが、その場の抜き差しならぬ空気を強調していた。平日の夕方の教室で彼と私はしばらく黙ったまま座っていた。困ったことに、私はそこでは教師なのだ。そして、彼はいじめられ、ひどく傷ついている。なんとかしたいという気持ちと、なんともならないという気持ちが混じり合い、私は彼にかけると言葉さえ見つけることができない。彼はゆっくりと切り出した。「先生、どうやったらいじめられなくなるんですか？」どうやったらいいんだろう、それは何度も何度も自分が辿った道だった。一般的な解決法があるのなら、教えて欲しいくらいだ。

その時に漸く、私は自分の話をしようと思いついた。傷ついた過去の経験について話したいとは思わない。尋ねられたとしても、ほとんどの場合、話さないと思う。その記憶はあまりに生々しく、思い出し、語るたびに自分を傷つけることになるからだ。しかし、私は話さねばならなかった。私だけは、彼の今居る状況を作り出してはならなかったはずなのだ。それなのに、私は……。自分に失望しながら、昔の話をし始めた。おれも、いじめられていたことがある……。

☆

小学校低学年のころ、女の子と「あやと

り」を必死でやっていたぼんやりした記憶がある。外にはあんまり出なかった。その傾向は、ゲームばかりするようになってさらに加速した。そんなこんなで、どんどん太っていき、ヘビーな体重になった。小学校四年生のとき、星のカービィとかドラゴンクエストのスライムの絵を描くのが好きで、休み時間になるたびに、友だちと二人、教室で絵を描いて楽しんでた。でも本当は、絵を描く楽しみはちょっとだけで、休み時間が怖かった。

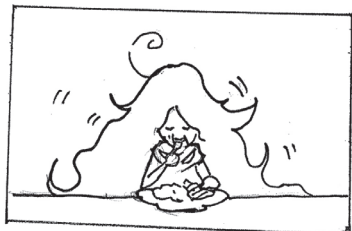
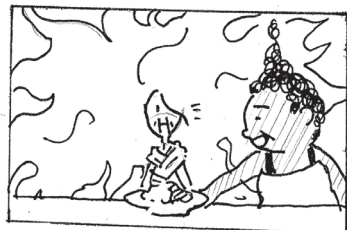
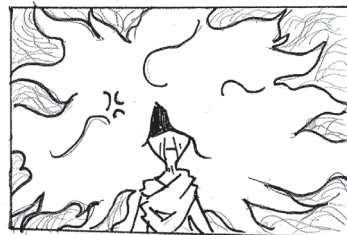
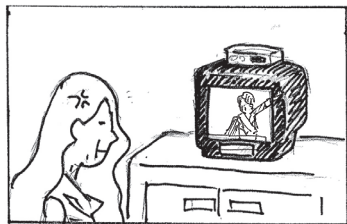
いつもどおり、ノートに色ペンでキングスライムを書いていたら、教室の入口の辺りから呼びかけられる。「ゴリラ！」また始まった。誰のことをゴリラと言っているのか明らかだ。とりあえず、我慢してみよう。「ブタゴリラ！」最初に挑発してきた声を周りの奴らが聞いていて、挑発する人数が増えていく。自分を囲むあの顔は忘れられない。軽蔑の薄ら笑いと、さあ楽しいことが始まったぞという表情。「分かってるだろう、我慢しておかないと、またひどいことになるぞ」という気持ちと「こいつらを一度で良いからカー杯殴ってやりたい」という気持ちがかせみぎ合う。声は、もはや机のすぐ前にまで近づいていた。「うるさい！黙れ！」ゴリラと嘲笑され、いらだつのがなぜだか分からなかった。教室にはご機嫌におしゃべりをしている人たちもいる。周りで見てる人たちに「こいつ弱虫やな」と思われている気がした。嘲笑は続く。

後記

発行にあたってご協力いただいた皆様、特にインタビューを快く受けてくださったお二方には、発行が遅れてご迷惑をおかけしましたが大変お世話になりました。ありがとうございます。(菊竹)

本巻でも紹介させてもらった浦河へてるの家には、「安心してサボれる会社づくり」という標語もあるのですが、「ここは安心して入っています。いくらサボってよいとは言っても、現実には仲間への負担や生活のことが気にかかり、安心してサボることは容易ではないようです。そこに決定されたルールとして「安心」という言葉を与えたとしても、最終的には個々の人々が安心を見つけていくしかないように思います。この標語は、安心を一緒に考えていくこと以上のことは保証しないのですが、それ故に良いなと思えるのです。この小さな冊子もその標語のように、これを通していろいろな人がそれぞれの形で居場所を探求することに開かれているものであればと思います。

三毛猫たち①



読んでくださった皆様のご意見
ご感想、聞かせていただけるとうれしいです。
下記連絡先へのお手紙、メール、研究室への訪問など
お待ちしております。ご訪問の際は事前にご連絡頂けると
助かります。
〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町 1-5
文学部本館三階 臨床哲学研究室
Mail: metier.clph@gmail.com
twitter: @clph_handai





臨床哲学のメチエ vol.21
2014年5月22日発行

編集：赤阪辰太郎 / 桂ノ口
結衣 / 川崎唯史 / 菊竹智之 /
金和永 / 仁平雅子